

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第56集

しら いし 遺 跡
白 石 遺 跡

2006

財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

地下に埋もれている遺跡は、先人の日々の生活と、不断の努力を知るうえで貴重な資料であり、国民共有の財産と言えます。こうした遺跡は本来、現状保存が望ましいところですが、開発工事などによりやむを得ず消失するものにつきましては、関係機関と調整を図り、記録保存を行うことになっております。

本書は、五十鈴川通常砂防工事に先立ち、山口県山口市白石に所在する白石遺跡について山口県山口土木建築事務所から委託を受けて、山口県ひとつくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器、古墳時代中期の河川跡、江戸時代の石垣、埋甕などを検出することができ、当時の人々の生活文化の実態を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、文化財保護に関する理解を深め、教育ならびに学術研究の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に際しまして多大なご尽力とご協力をいただきました周辺地域の皆様方、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年 3月

財団法人 山口県ひとつくり財団
理事長 村岡 正義

例 言

- 1 本書は平成17年度に実施した、白石遺跡（山口県山口市白石地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は五十鈴川通常砂防工事に伴い、財団法人山口県ひとつくり財団が山口県山口土木建築事務所
所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。
調査主体 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 調査研究員 小 南 裕 一
文化財専門員 中 村 美 夫
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県山口土木建築事務所ならびに
地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の図1は山口市教育委員会作成の「山口市埋蔵文化財地図」を一部改変して使用した。
- 6 本書で使用した方位は、遺構配置図に関しては国土座標（世界測地系）の北で示し、個別遺構に
関しては磁北で示している。また標高は海拔標高（m）である。
- 7 本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土
色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 9 資料の鑑定・分析について田畑直彦氏（山口大学埋蔵文化財資料館）、竹内奈央氏（山口大学人
文科学研究科）、濱崎真二氏（下関市教育委員会）、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージア
ム）らにご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表す。
- 10 本書の執筆・編集は中村の協力を得て、小南が行った。

本文目次

I	位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	調査の成果	5
1	調査方法と結果	5
2	土層	9
3	遺構	10
4	遺物	14
IV	まとめ	41

挿図目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	図14	II - a区遺物包含層 出土遺物(3)	20
図2	試掘調査時出土土器	5	図15	II - a区遺物包含層 出土遺物(4)	21
図3	調査区設定図	6	図16	II - a区遺物包含層 出土遺物(5)	22
図4	遺構配置図	7・8	図17	III - b区河川跡出土遺物(1)	24
図5	調査区土層断面図	9	図18	III - b区河川跡出土遺物(2)	25
図6	土坑実測図	10	図19	III - b区河川跡出土遺物(3)	27
図7	河川跡実測図	11	図20	III - b区河川跡出土遺物(4)	28
図8	石垣実測図	12	図21	木製品実測図	29
図9	埋甕実測図	13	図22	中・近世の出土遺物	30
図10	不明遺構実測図	13	図23	縄文・近世の出土遺物	31
図11	I地区遺物包含層 出土遺物	15	図24	教育学部附属山口中学校出土土器	42
図12	II - a区遺物包含層 出土遺物(1)	17	図25	湯田楠木町遺跡出土土器	43
図13	II - a区遺物包含層 出土遺物(2)	18			

表目次

表1	出土土器観察表(1)	32	表6	出土土器観察表(6)	37
表2	出土土器観察表(2)	33	表7	出土土器観察表(7)	38
表3	出土土器観察表(3)	34	表8	出土土器観察表(8)	39
表4	出土土器観察表(4)	35	表9	出土土器観察表(9)	40
表5	出土土器観察表(5)	36	表10	出土石製品観察表	40

図版目次

図版1	遺跡遠景	図版17	出土遺物(1)
図版2	遺跡近景	図版18	出土遺物(2)
図版3	I-a区全景、I-b区全景	図版19	出土遺物(3)
図版4	II地区全景、III地区全景	図版20	出土遺物(4)
図版5	III-d区全景、I-a区土層① I-a区土層②、I-b区土層 I-b区包含層落ち込み	図版21	出土遺物(5)
図版6	I-a区杭列検出状況① I-a区杭列検出状況②	図版22	出土遺物(6)
図版7	II-a区包含層土層 II-a区遺物出土状況	図版23	出土遺物(7)
図版8	SK1・2半裁、SK1・2完掘	図版24	出土遺物(8)
図版9	河川跡全景、河川跡ベルト設定①	図版25	出土遺物(9)
図版10	河川跡ベルト設定② 河川跡南壁土層①	図版26	出土遺物(10)
図版11	河川跡南壁土層② 河川跡南北土層ベルト	図版27	出土遺物(11)
図版12	河川跡遺物出土状況① 河川跡遺物出土状況②	図版28	出土遺物(12)
図版13	河川跡集石 河川跡集石除去状況	図版29	出土遺物(13)
図版14	河川跡完掘状況① 河川跡完掘状況②	図版30	出土遺物(14)
図版15	石垣1、石垣2	図版31	出土遺物(15)
図版16	埋甕1、埋甕2、埋甕3 SX、SX土師皿検出状況 SX完掘状況	図版32	出土遺物(16)
		図版33	出土遺物(17)
		図版34	出土遺物(18)
		図版35	出土遺物(19)
		図版36	出土遺物(20)
		図版37	出土遺物(21)
		図版38	出土遺物(22)

I 位置と環境

1 地理的環境

白石遺跡は山口盆地のほぼ中央部、鴻ノ峰から派生するゆるやかな丘陵裾部に立地する。鴻ノ峰東縁から流れてくる五十鈴川が、遺跡の北側を横断しているが、地形的にみてこの流れは不自然な点もあり、人為的に付け替えられている可能性がある。調査区の南側、現山口市街地は沖積低地となっているが、現況では遺跡が存在するか否か明らかではない。

2 歴史的環境 (図1)

山口盆地内には先史時代～近世までの諸遺跡が点在し、中世末期には大内氏の居館が築かれるなど、歴史的に見てきわめて重要な地域である。ここでは白石遺跡周辺の遺跡について重点的に記述を行いたい。

縄文時代の遺跡としては松柄遺跡、大内氏関連町並遺跡、中込田遺跡などがある。いずれも後・晩期の遺跡であり、特に中込田遺跡では晩期中葉段階の土坑、柱穴等、集落の一部が確認されている。こうした縄文時代の遺跡は、沖積化が進行した低地帯に立地しており、打製石斧の出土も考慮すると生業活動の一環として農耕が行われていた可能性も指摘できる。

弥生時代の遺跡として、萩峠遺跡、糸米上野遺跡、亀山遺跡、赤妻遺跡などがある。いずれも集落遺跡であり、萩峠遺跡、糸米上野遺跡では貯蔵穴が確認されている。また、部分的な発掘調査しか行われていないため詳細は不明であるが、亀山遺跡は環濠を持った高地性集落の可能性もある。これらの遺跡の年代はいずれも弥生時代前期から中期に該当するものと考えられる。

後期から終末期の集落遺跡は僅少であるが、墳墓は比較的多く調査されている。白石遺跡に近接する丘陵上には茶臼山古墳、糸米遺跡などがあり、前者では箱式石棺が、後者では箱式石棺、土坑墓、方形・円形台状墓が検出されている。いずれも弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて形成されたものと見られる。

古墳時代の開始は通常、前方後円墳の築造によって規定され、年代的には3世紀中頃から後半にその出現時期が認められるが、山口盆地内ではそうした古い前方後円墳は確認されておらず、5世紀前半の新宮山1号墳(吉敷)が最古の例である。この古墳とほぼ同時期に築造されたと考えられる赤妻古墳は円墳もしくは帆立貝式古墳と考えられ、埋葬主体として舟形石棺を採用している。副葬品には鏡、甲冑、鉄剣などがあり、畿内色のきわめて強い古墳であると考えられている。後期古墳としては朝倉河内古墳群、鴻ノ峯古墳群などの群集墳が知られ、横穴式石室を埋葬主体とする古墳が数多く築造されている。また、前記した茶臼山古墳、糸米遺跡でも横穴式石室の古墳が確認、調査されている。

古代から中世前半期の遺跡については断片的な遺物の出土が知られるのみで不明な点が多いが、中世後半期(室町時代)になると大内氏が居館を山口に移したことにより、防長両国のみならず西日本の中心的な都市となる。大内氏館・築山遺跡ならびに大内氏関連町並遺跡では15世紀後半から16世紀前半にかけての遺構、遺物が数多く検出されており、当時の繁栄がうかがえる。しかし、大内氏の滅亡、毛利氏の萩築城などにより、一帯は政治・文化の中心地としての地位を失い衰退していくようである。



- | | | | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|
| 001 七尾山城跡 | 011 糸米五反田遺跡 | 021 観音堂跡 | 031 生目八幡宮古墳 |
| 002 古熊遺跡 | 012 鴻ノ峰古墳群 | 022 荻峠遺跡 | 032 赤妻古墳 |
| 003 八幡窯跡 | 013 糸米庁川遺跡 | 023 湯田条里跡 | 033 兄弟山城跡 |
| 004 大内氏館・築山遺跡 | 014 鴻ノ峯城跡 | 024 祇園ヶ森古墳 | 034 中込田遺跡 |
| 005 大内氏関連町並遺跡 | 015 糸米遺跡 | 025 朝倉大歳遺跡 | |
| 006 松柄遺跡 | 016 木戸神社古墳群 | 026 朝倉遺跡 | |
| 007 亀山遺跡 | 017 糸米上野遺跡 | 027 湯田楠木町遺跡 | |
| 008 古城ヶ岳城跡 | 018 障子ヶ岳城跡 | 028 朝倉河内古墳群 | |
| 009 白石遺跡 | 019 障子ヶ岳南遺跡 | 029 朝倉金頭遺跡 | |
| 010 茶臼山古墳 | 020 権現山古墳 | 030 赤妻遺跡 | |

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査にいたる経緯

山口県山口土木建築事務所は、五十鈴川通常砂防工事に先立って、埋蔵文化財包蔵の可能性がある山口市白石地内の試掘調査を山口県教育委員会文化財保護課に依頼した。これを受けて文化財保護課は平成16年7月に工事予定地区の試掘調査を行い、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器を含む遺物包含層や、中・近世期と考えられる柱穴などを検出した。この結果を受け、山口県教育委員会と山口県土木建築事務所が協議を行い、平成17年度に発掘調査を行うことが決定された。発掘調査は山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成17年4月から着手することとなった。

2 調査の経過

平成17年4月初旬より、調査区の現況確認、県山口土木建築事務所との打ち合わせ等、事前の諸準備に取りかかり、4月下旬には近隣の小・中学校、消防署等に安全確保のための協力と理解をお願いした。その後、機材の準備等を行い、5月9日より機械力による表土除去作業を開始し、本格的な発掘調査に入った。

発掘調査は、対象地を大きく3つに区分し行うこととなった。その理由は、表土除去の際生じた排土を場外搬出することができず、調査区域に排土置き場が必要であり、全面的な掘り下げができなかったためである。さらに3つに区分した調査区の中には生活道等が貫入しており、こうした部分を残すかたちでの調査となった。

I地区の調査は、5月9日より開始した。機械による表土除去段階で予想以上の客土量であることが判明し、掘り下げは難航したが、安全勾配等の確保に留意し作業を行った。I地区においては試掘調査の段階で、遺物包含層の存在が確認されていたが、この面まで掘り下げてしまうと湧水がはげしく、調査区内が常時水浸しになる恐れがあった。そこで、機械力による表土の除去は包含層の面より30cmほど高いところで止め、あとは人力による掘り込みと埋め戻しをグリットごとに繰り返す方針を採った。

表土除去終了後の5月12日より、グリットを設定し、人力による掘り込みを行い、土器、木製品などの遺物を検出することができた。なお、この過程で出土した遺物等については、グリットごとにドットで記録し、写真撮影をおこなった。また、I地区調査期間中の6月1日には山口大学教育学部附属中学校の生徒たちが来跡し、発掘体験を行った。発掘初心者のはらは、熱心に話を聞き、作業を行ってくれた。



表土除去



遺構掘り込み

I地区の平板実測、写真撮影、埋め戻しの終了後、6月15日よりII地区の表土除去に取りかかった。I地区と比較して客土量は少なく、近世の石垣など遺構も多く検出することができた。また、遺物包含層も検出され、弥生終末から古墳時代初頭にかけての良好な土器資料を数多く得ることができた。II地区の調査開始とともに入梅宣言が出されたが、降雨量は少なく、作業は順調に進行していった。遺構の掘り込み、写真、図面による記録等を完了させたのち、7月8日に空中写真撮影を実施。終了後は遺物包含層未掘部分の掘り下げ、近世遺構面下の確認を行ったが、遺物包含層からは良好な土器資料の出土が相次ぎ、近世遺構面下の調査では、用途不明の土坑を確認することができた。こうした成果を図面、写真に記録し、II地区の調査は終了した。

III地区の表土除去はII地区の埋め戻しと並行して、7月21日より開始した。表土除去作業の段階では、目立った遺構は確認されなかったが、人力による遺構検出、トレンチの掘り込みによって古墳時代中頃の河川跡が存在することが明らかとなった。河川跡の掘り込みは土層ベルトを残しつつ、4つのグリットに区分して行い、土器を中心とした多くの遺物を得ることができた。この河川跡の掘り込みが土層ベルト部分を残してほぼ終了した8月11日に空中写真撮影を行い、III地区の全景を記録した。

その後土層ベルトの除去や平板測量、個別遺構の実測等を行い、最後に駐車場の確保のため未掘であった調査区北東端部の掘り込みを8月25日より開始した。この区画では柱穴などがまばらに認められる程度であり、調査面積もわずかであったため、8月29日には写真撮影、平板測量も完了し、調査は終了した。その後、調査区内の清掃や、機材の整理等を行い、8月31日に現地での作業をすべて終了した。調査終了後はすみやかに山口土木建築事務所にその旨通達し、現場での検査を受け、引渡しを行った。



発掘体験



空中写真撮影

現地での作業終了後は、山口県埋蔵文化財センターにて、調査記録の整理、出土遺物の接合、図化、写真撮影などの整理作業を行い、本報告書刊行の運びとなった。

発掘調査区は保育園、小学校、中学校等の学校施設に隣接し、児童らの通学路となっていた。こうした点から、調査区の安全管理にはかなり気を使った。結果的に調査区を一気に掘り込まなかったことは安全対策面において好都合であった。また本年度は梅雨に雨が少なく、夏は猛暑の日が続き、調査に従事した作業員の皆さんには体力面、精神面ともに多大なご苦勞をかけた。しかし反面、少雨のおかげで、作業を計画通りに進めることができ、ほぼ予定どおりに調査を終了させることができた。

このように大きな事故や怪我もなく、無事調査を終了させることができ、一定の成果を収めることができたのも、調査に従事した作業員や関係各位の多大なご理解、ご協力の賜物であり、ここに感謝の意を表したい。

Ⅲ 調査の成果

1 調査方法と結果

先述したように排土の関係で、調査区を大きく3つに分け、調査をおこなった。南西側からⅠ地区、Ⅱ地区、Ⅲ地区に分け、さらに生活道確保のため分断された小区画にアルファベットの小文字を付し、区分した(図3参照)。各地区は遺構面までの高さ、遺構の残存状況等で大きな差をみせている。基本的には北東側のⅢ地区から南西側のⅠ地区にむかって傾斜していく旧地形であり、Ⅰ地区側が低くなっている。また、遺物包含層はⅠ-a区とⅠ-b区南西隅、Ⅱ-a区南西隅に認められ(図4参照)、Ⅰ地区とⅡ-a区では部分的に谷状地形が形成され、そこに遺物が流れ込んだものと考えられる。遺物包含層は暗灰色もしくは黒褐色の粘質土を呈しており、Ⅰ-b区では分層可能であったが、暗灰色包含層から出土する遺物量は少ない。いずれも植物腐敗土を有し、自然木や木製品を含んでおり、堆水によって形成された土層であることがわかる。なお最も良好な土器資料が得られたのはⅡ-a区の包含層であるが、ここからは試掘調査の段階でも残存状態が良い弥生終末～古墳初頭の土師器甕が出土している(図2)。またⅠ-a地区では、包含層中から杭列が確認された。水田に伴う施設の可能性が考えられたため、土層を観察しつつ掘り下げたが、畦や水路等の施設を検出することはできなかった。

Ⅱ-b区については試掘調査時のデータで、北東側では地表下30cm程度の面に遺構が存在することが指摘されていたため、この高さで遺構面を検出した。検出された遺構は江戸時代末期から明治時代初期にかけてのものが多く、遺構と考えて掘り下げていたものの中には近代の攪乱も含まれており、明確な遺構との峻別が難しかったものもある。また、Ⅱ-b区の南西側は一段低くなっており、柱穴や土坑が検出されたが、出土遺物がほとんどなく、時期決定は困難であった。

こうした状況であるために、下層に遺構面が存在することが予想されたため、北東側と南西側それぞれにトレンチを設定した。この調査の結果、段落ち部分の近くで、底面に木を敷いた用途不明遺構を検出することができた。

しかし、この遺構も出土遺物などから江戸時代の所産である可能性が高く、予想していたほど古い時期のものではなかった。他のトレンチでも明確な遺構は確認できず、おそらくこの区画には近世以前の遺構は存在しないということが判明した。

Ⅲ地区に関してはⅢ-b区で古墳時代と考えられる河川跡を検出することができたが、この河川と同時期の遺構は確認するこ

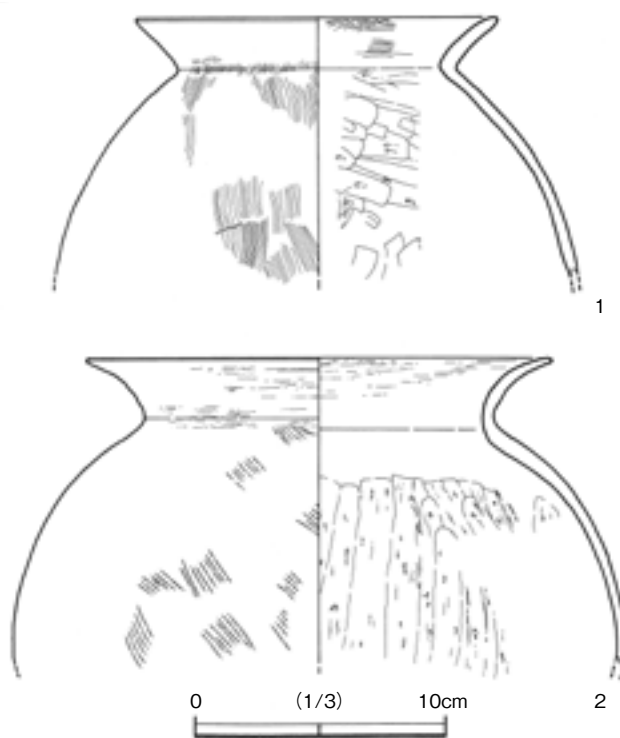


図2 試掘調査時出土土器

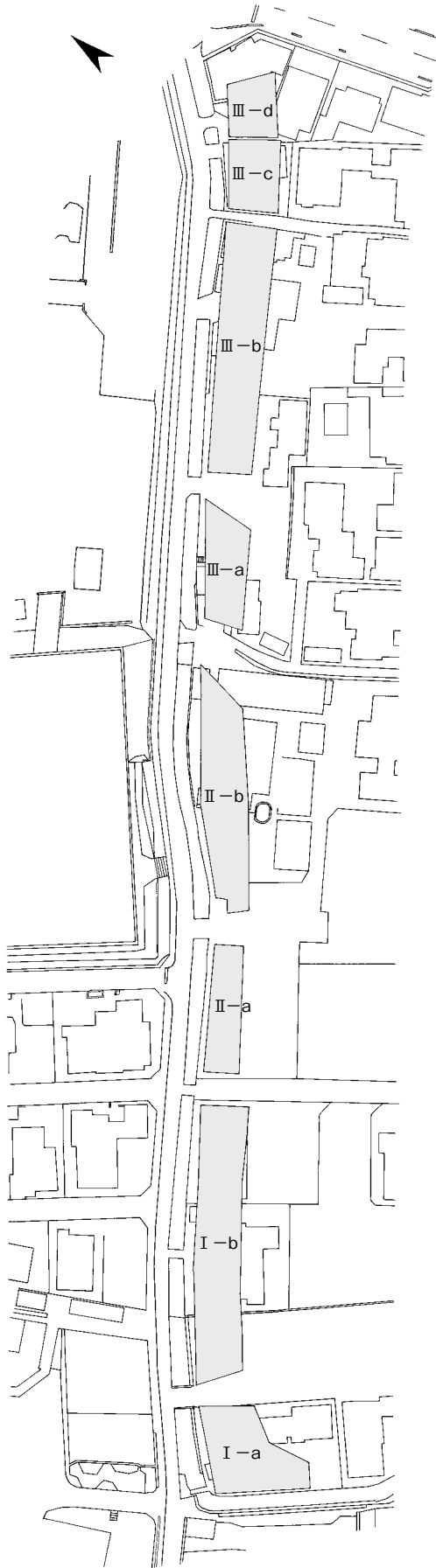


図3 調査区設定図 (1/1200)

とができなかった。確認された柱穴や土坑からは遺物がほとんど出土せず、正確な時期を知りえないが、おそらく、中・近世のものが中心であると考えられる。古墳時代の河川については、本調査区の北側に隣接する山口大学附属幼稚園・山口小学校の昭和61年度の調査でトレンチ調査ながら、その存在が予想されていた。Ⅲ-b区で検出された河川と何らかの関連をもつ可能性がある。また、Ⅲ-c地区では遺構検出の段階で、溝状の落ち込みを確認し、掘り下げを行ったが、壁の立ち上がりが曖昧で、人為的なものではなかった。また、遺物は1点も出土しておらず、詳細な時期については不明である。

以上が各調査区成果の概観である。調査対象範囲が幅狭であり、五十鈴川に隣接しているため、包含層や遺構の広がりについては不明な点が多い。特に各調査区とも北西側が、五十鈴川護岸のため、削平・攪乱されており、この部分に関しては十分な調査成果を得ることができなかった。しかし、遺物包含層の形成や、河川に多くの土器が投棄されていることを踏まえれば、付近に集落跡の存在は十分に考えられる。実際、山口大学埋蔵文化財資料館が発掘調査した、教育学部附属小学校の構内では弥生・古墳時代の竪穴住居が検出されており、この付近に集落が形成されていた可能性が高い。また、本調査区の南側に位置する附属中学校でも古墳時代初頭の遺物包含層が形成されており、かなり広い範囲にわたって当該期の集落が展開していた可能性もある。

また、近世の遺構については石垣、埋甕等が確認されたものの、ほとんどが近世末期に属するものであると考えられ、遺物には明治期のものもふくまれていた。中世から近世前半期の遺物はまばらであり、とくに大内氏全盛期である室町時代末期の遺物・遺構が希薄であることは、この時代における土地利用のありかたを示しており、今後周辺遺跡の調査をおこなう際に留意しておくべき点であろう。

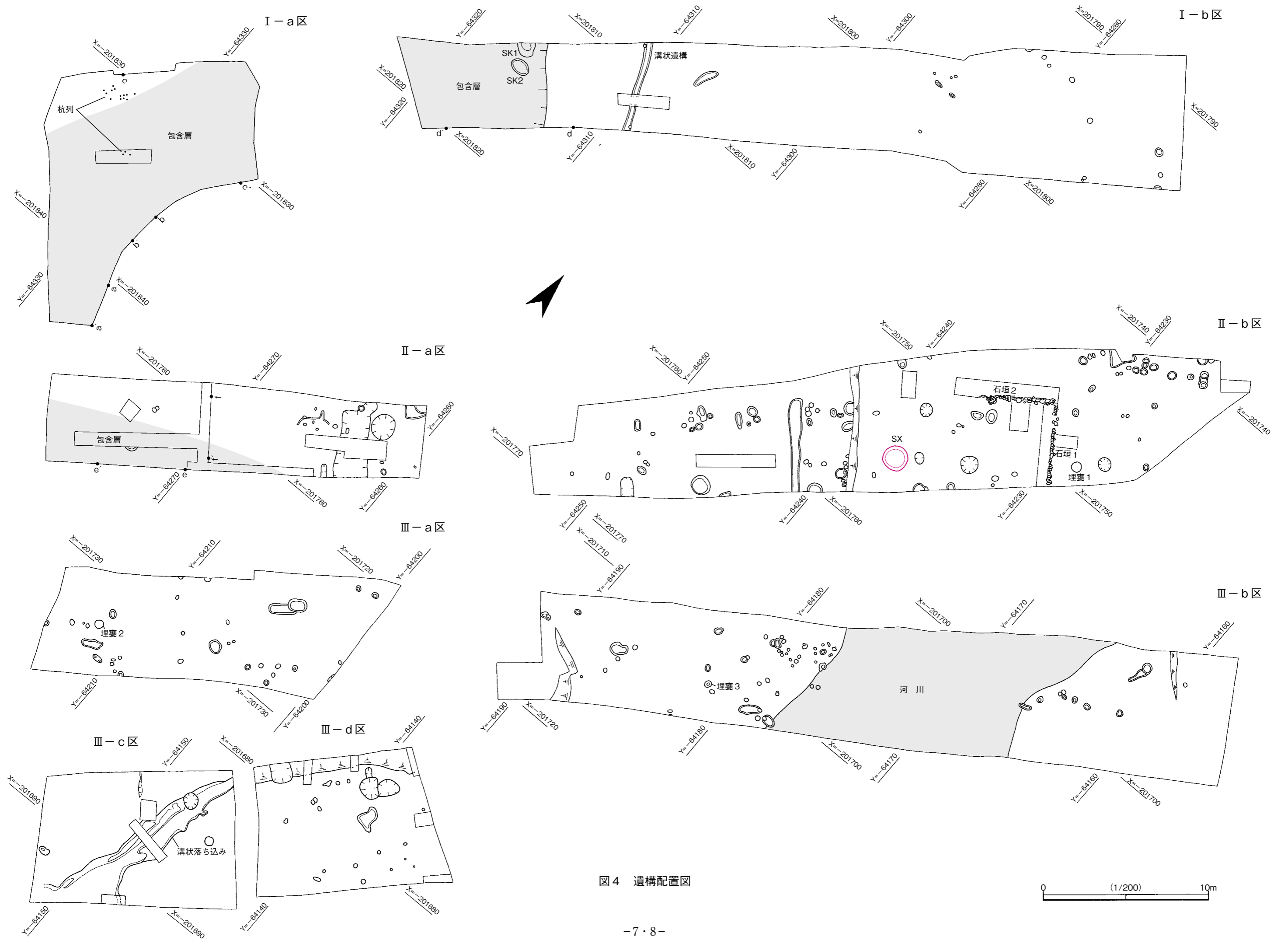


図4 遺構配置図

2 土層 (図5、図版5)

土層については、遺物包含層が形成されていたⅠ・Ⅱ地区のものを図示した(図5)。Ⅰ地区については1m近い造成土があり、その下が昭和期の水田耕作土、床土となっている。その下にさらに水田耕作土、床土が形成されており、この区域が水田として複数回利用されていたことを物語っている。

遺物包含層は黒褐色を呈し、植物腐敗土を含んでおり、Ⅰ-a区ではほぼ共通した土色である。なお、Ⅰ-a区ではこの遺物包含層が調査区西側で途切れており、砂質土が堆積している(c-c'土層参照)。Ⅰ-b区では黒褐色土層の上層に暗灰黄色土が堆積しており(d-d'土層参照)、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が包含されているが、その量は少ない。

Ⅱ-a区の遺物包含層は3つに分層(e-e'土層参照)できたが、最も良好な土器資料を得られたのはⅠ地区と共通する黒褐色粘質土層であった。包含層の範囲は調査区北西隅であり、川側にむかって下がりながら堆積している(f-f'土層参照)。

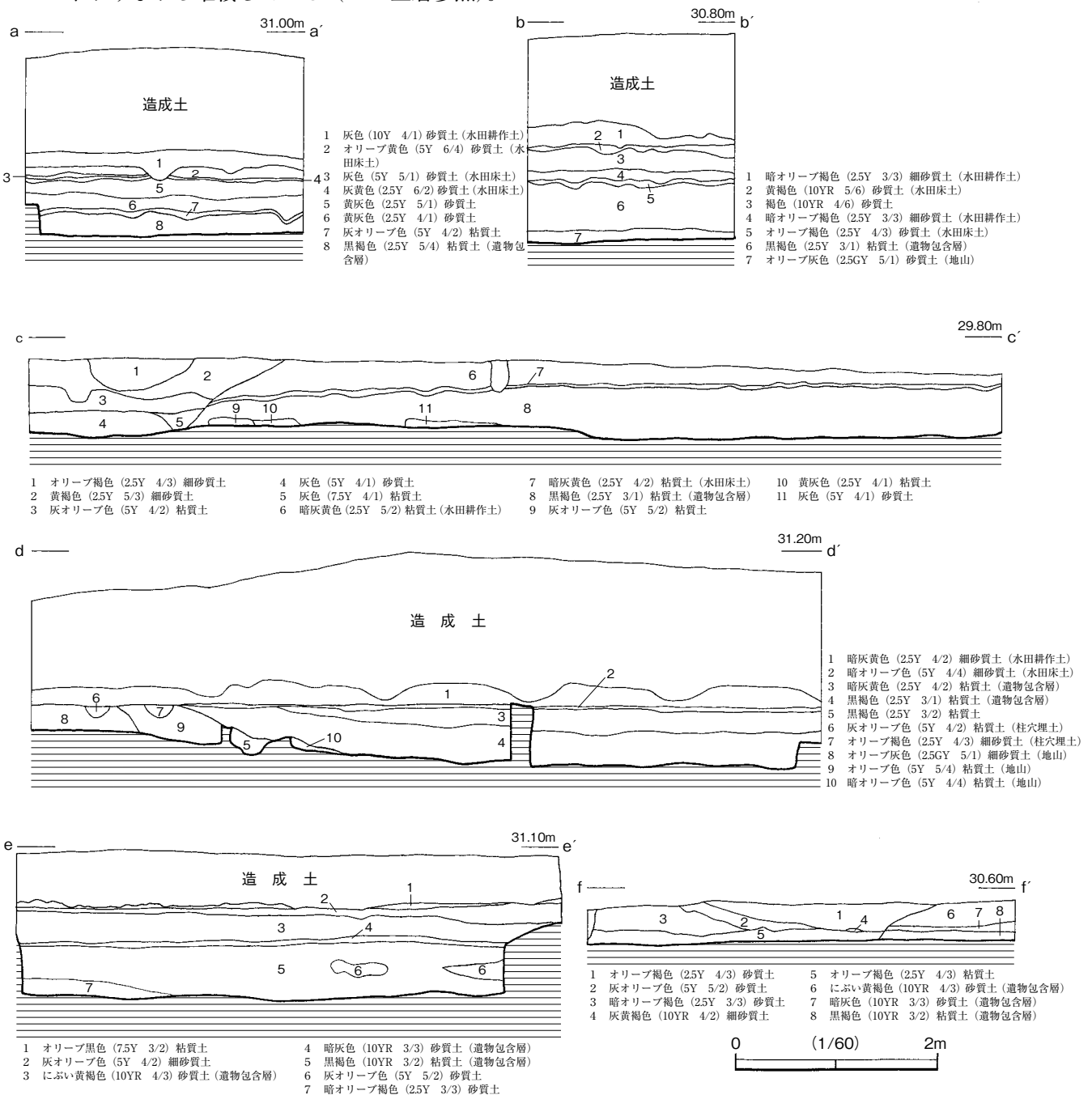


図5 調査区土層断面図

3 遺構

(1) 土坑

発掘調査時に土坑として認定したものは十基ほどあったが、いずれも遺物が出土せず、詳細な時期は不明であった。Ⅱ-b区やⅢ区で検出されたものに関しては、他遺構との関連からほとんどが近世末期のものと考えられる。ここでは黒色粘質土（弥生終末～古墳時代初頭）下から検出された2基の土坑について説明したい。

SK 1（図6、図版8）Ⅰ-b区の北西端、調査区壁際で検出された。現存長130cm、幅130cm、深さ45cmを測る。平面形は不整形で、南側の一部は削平されている。二段掘りであり、遺物包含層である黒褐色粘質土が堆積していることから、利用後埋め戻されず放置されていたものと考えられる。遺物は出土しておらず詳細な時期については不明であるが、遺物包含層との関係から少なくとも弥生終末期以前に掘り込まれたものであると考えられる。

SK 2（図6、図版8）SK 1の南東側で隣接して検出された。長さ110cm、幅80cm、深さ20cmを測る。平面形は楕円形で、ほぼ東西に主軸をとっている。床面、埋土中に礫が認められるが、床面のものは基盤層に含まれるものであろう。SK 1同様、黒褐色粘質土が堆積しており、開放されたまま放置されていたと考えられる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SK 1同様、少なくとも弥生終末期以前に掘り込まれたものであろう。

(2) 河川（図7、図版9～14）

Ⅲ-b区で検出された。河幅は最も広いところで約15m、深さは深いところで検出面から1m程度

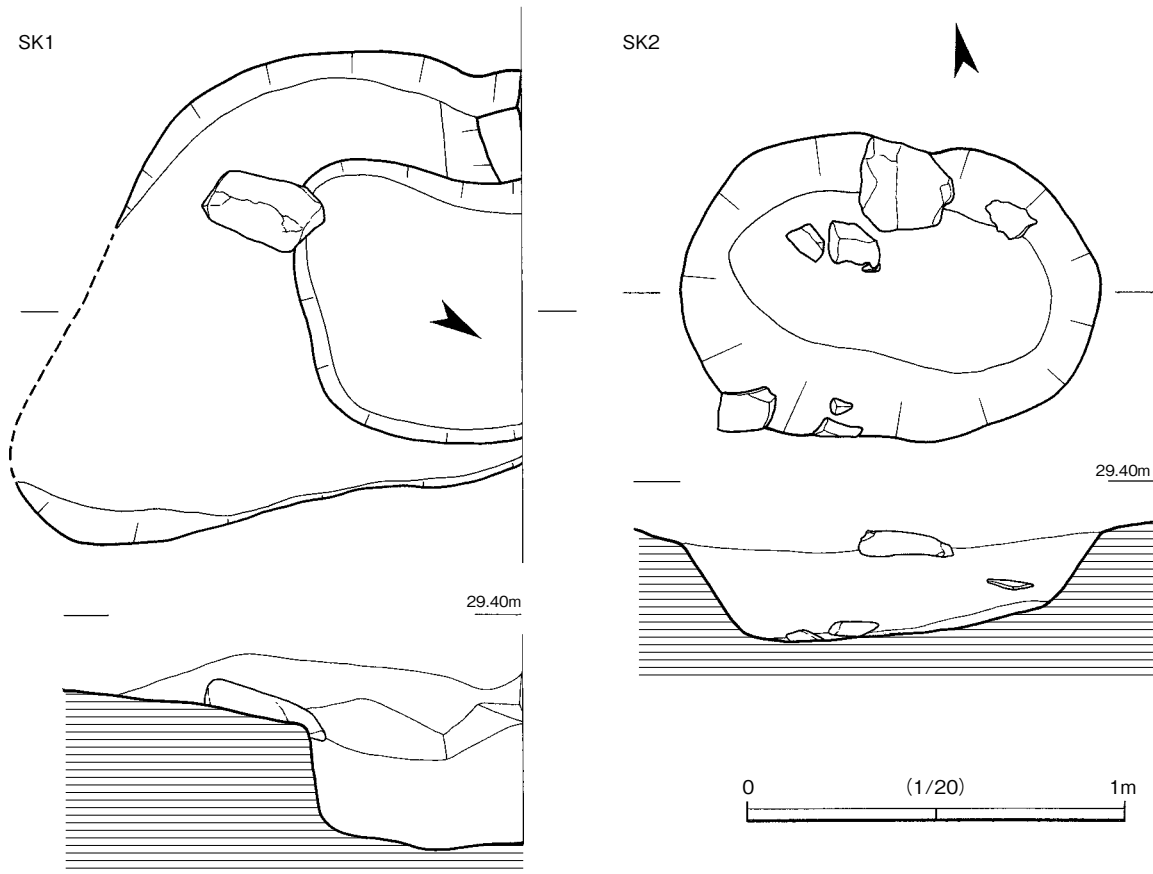


図6 土坑実測図

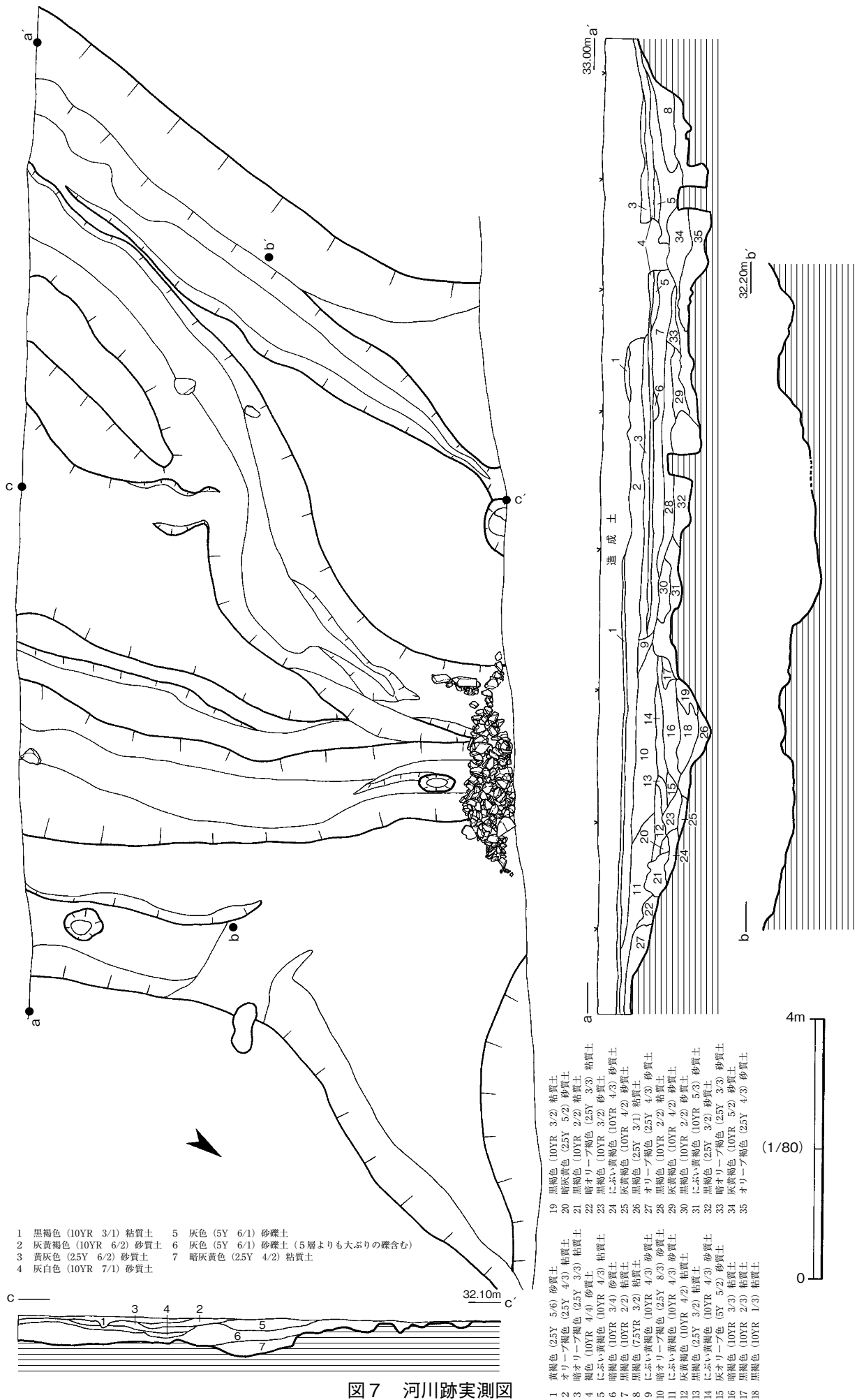


図7 河川跡実測図

である。この河川内には大きく3つの流路が認められ、このうち2本についてはもともと1本であったものが分岐したものであると考えられ、分岐箇所には集石が形成されている。この集石は人為的なものであるが、その用途については不明である。

土層については砂質土と粘質土の互層となっており、流水と滞水が繰り返されていたことが明らかである。流水によってえぐりとられ、オーバーハングした流路の肩部や河床面の凹凸は、はげしい流れを彷彿とさせる。また、遺物の出土状況についてであるが、河床面からの出土はきわめて少なく、滞水によって形成されたと考えられる黒褐色の粘質土層から多くの資料が得られている。河川の流水が一時的に停止し、沼地状になった箇所に廃棄されたものと考えられる。

(3) 石垣 (図8、図版15)

Ⅱ-b区で検出された。南北側に軸をとるものを石垣1、東西側に軸をとるものを石垣2と命名した。両者は北西端部で接しているが、同時期のものかどうかは不明である。

石垣1は、現存長5m程度、小ぶりの石を3段に積んで構築している。石の面は南西側を向いている。石垣裏にトレンチを設定したが、裏込め石や時期が判明するような遺物は検出されなかった。

石垣2は現存長3m、やや大ぶりの石を4・5段積んで構築し、石の面は北西側を向いている。石垣1と比較し、石の積み方が乱雑であり、南西側で突然構築が放棄されている。石垣裏にトレンチを設定したものの、裏込石や時期が判明する遺物は検出されなかった。

石垣1、2とも正確な構築時期は不明であるが、周辺から出土する遺物はおおよそ江戸末期から明治初頭期のものであり、ほぼこの時期の所産であると考えておきたい。おそらく屋敷割りの区画として機能していたものであろう。

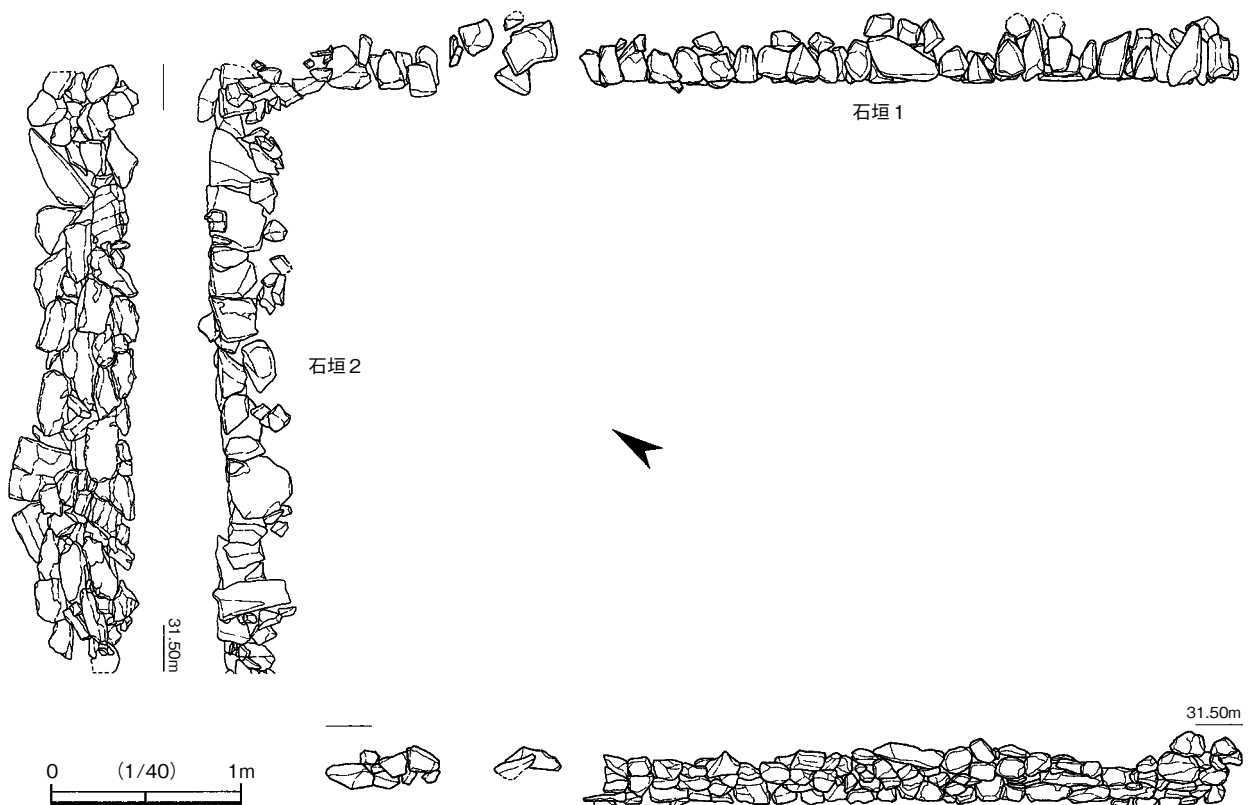


図8 石垣実測図

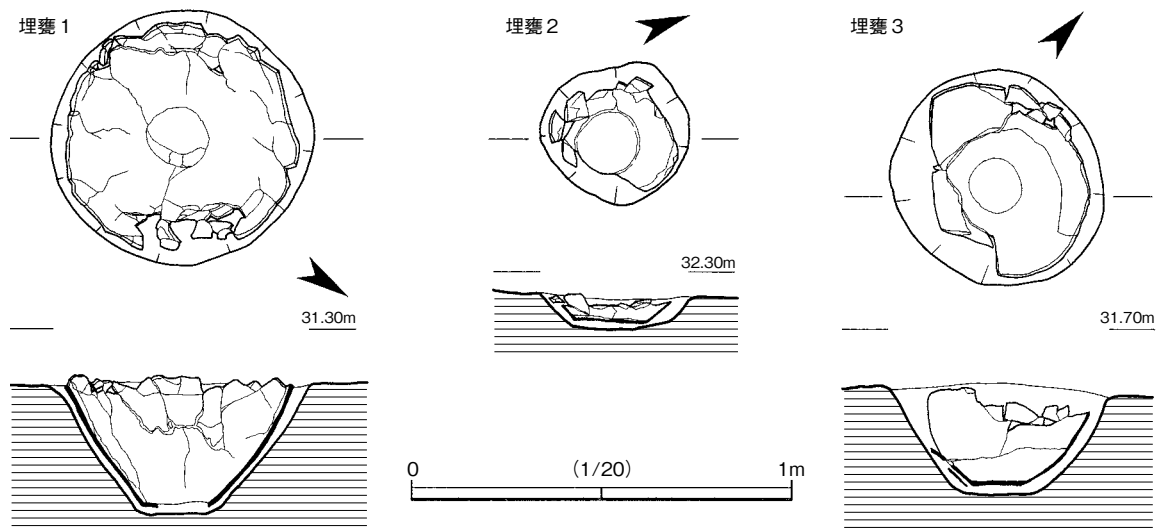


図9 埋甕実測図

(4) 埋甕 (図9、図版16)

調査区内で3基を確認した。いずれも単独で存在し、密集状態を示すものではない。また、いずれも削平のため、口縁部と胴部中位を欠損している。

埋甕1はⅡ-b区石垣1の北東側で検出した。直径約70cmの円形、深さ約35cmの掘り方に瓦質の大甕が埋設されていた。今回検出した埋甕の中では最も残存部位が大きかったが、底部をほとんど欠損しているため、復元には至らなかった。

埋甕2はⅢ-a区の南西側で検出された。直径約40cmの不整円形、深さ約8cmの掘り方に瓦質の甕が埋設されていた。大きく削平を受けており、残存状況はきわめて不良である。甕内面には石灰質のかたまりが付着しており、便槽として利用されていたことが明白である。

埋甕3はⅢ-b区の河川跡西側で検出された。直径約55cmの円形、深さ約30cmの掘り方に瓦質の大甕(図23-214)が埋設されていた。

(5) 不明遺構 (図10、図版16)

Ⅱ-b区の中央やや東寄り、下層面確認のため、部分的な深掘りをおこなった際確認された。

長軸約190cm、短軸約160cmの不整円形で、深さは約45cmを測る。土坑北端側は二段掘りであり、北東側の壁には礫がはめ込まれている。床面には加工痕跡のない自然木が少なくとも8本敷き置かれており、さらにその上に土師器皿が据えられていた。この土師器皿の年代は、その形態的特徴から17世紀以降のものである可能性が高く、遺構の年代の一端を示している。おそらく遺構の廃絶に際して、置かれたものと考えられる。

用途については不明であるが、その大きさから、地下に設けられた貯蔵施設ではないかと考えている。しかし、そうであったとしても、床面に置かれた自然木や壁にはめ込まれていた礫がどういった機能を果たしていたのかについては不明である。

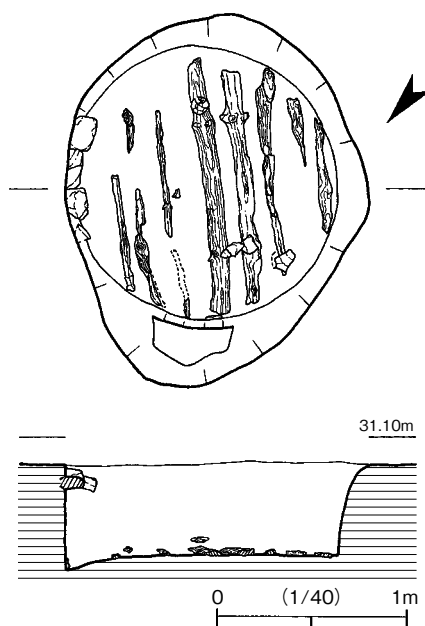


図10 不明遺構実測図

4 遺物

本遺跡からはおもに遺物包含層、河川跡から弥生時代終末～古墳時代中期の遺物、とりわけ土器資料が多く得られた。そこでまず、包含層、遺構単位ごとに該当時期の土器群について説明をおこなう。

(1) I地区遺物包含層出土遺物(図11、図版17・18)

3は弥生時代中期の広口壺口縁部であると考えられる。口縁端部に強いナデを施し、中央部が若干くぼむ形態である。4は複合口縁壺の一部で櫛描波状文が施されている。5は大型壺の頸部片であると考えられる。扁平な突帯に鋸歯状の文様を施文している。6は複合口縁壺であり、口縁端部が外反気味に立ち上がる。器壁が厚く、しっかりしたつくりである。4～6は弥生時代終末～古墳時代初頭の所産であると考えられる。

7は鉢形土器で、内面のケズリが顕著である。8は甕であり、口縁部の外面が若干肥厚している。内外面ともナデが施され、丁寧なつくりである。

9・10・23は器台である。9は器壁が分厚く、上端部が若干突出する形態であると考えられる。10は畿内系器台の可能性が高く、内面に暗文状のミガキを施している。畿内庄内式新相から布留式古相に該当するものと考えられる。23は脚端部であり、器壁が分厚く、接地面も広い。大型の部類に属するものであろう。

11～14はミニチュア土器。11は丸底であるが、その他は平底である。13・14は胎土が精選されており、内外面ともに丁寧なナデが施されている。12は皿形の器形を呈するもので、口縁端部に細い粘土帯を貼り付け、接合部が沈線状になっている。

15・16・18・19・22は高杯脚部である。15は短脚タイプで透かし穴が施されている。16・18・19は脚端部が強く屈曲する形態であり、19は外面に粗い刷毛目が認められる。また18は他の個体が橙色系の色調であるのに対して、灰白色系の色調をなしている。22は脚端部であり、器壁が薄く、内外面ともに横ナデの痕跡が顕著である。15・22は古墳時代前期の所産、16・18・19は古墳時代中期の所産であると考えられる。

20・21は台付鉢の脚部である。20は胎土が精選され、内外面ともに丁寧なナデが施されているのに対して、21は胎土に砂粒を多く含んでおり、調整も粗雑である。また21の内面には非貫通の孔が施されている。

24～26は底部。このうち25は平底を呈し、弥生時代中期甕の底部であると考えられる。これに対して24・26は凸レンズ状の形態であり、弥生時代終末～古墳時代初頭のものであると考えられる。24は甕、26は壺の底部であろう。

17は須恵器杯蓋である。天井部境界部分の稜が明瞭である。形態的特徴から6世紀前半代に比定できるものではないかと考えている。

I地区から出土した遺物は、小片が多く、接合できたものも数少ない。上記したように弥生時代終末から古墳時代中期のものが出土しており、包含層は一定の時期幅をもっている。

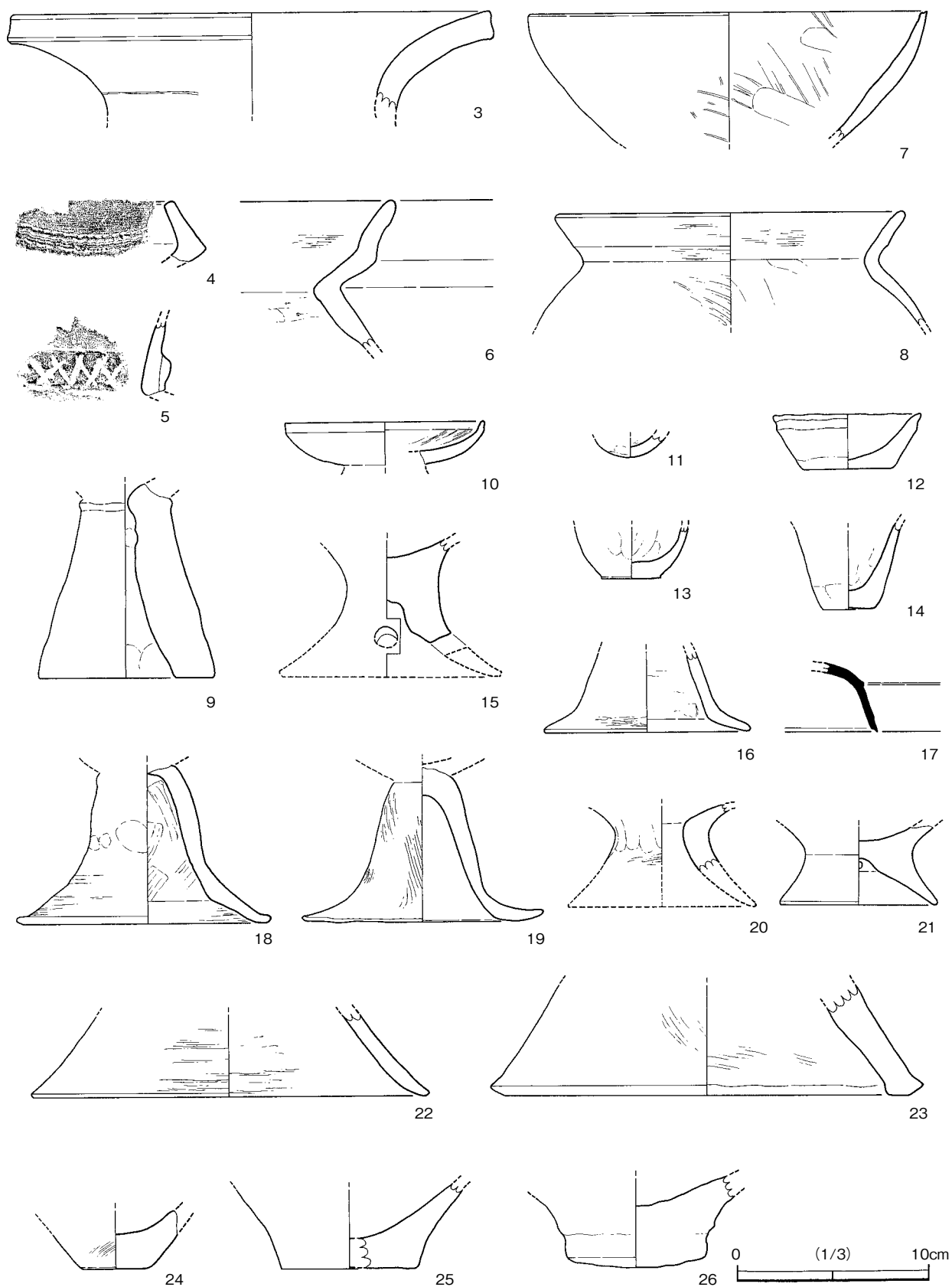


图11 I地区遺物包含層出土遺物

(2) II-a地区遺物包含層出土遺物 (図12~図16、図版19~26)

27~37は壺である。27は口縁部が直立気味に立ち上がる。28は頸部付近の資料であり、内面には指押さえ痕跡が顕著である。29は複合口縁を呈する。口縁部は短く直立気味に立ち上がる。また、頸部には粗い刷毛目調整が斜め方向に施されている。30は大型壺の頸部である。扁平な突帯に斜格子状の刻目が施されている。胴部との接合部分で明瞭な剥離痕が認められる。31は大型の複合口縁壺で、口縁部は外反気味に立ち上がるものと考えられる。櫛描波状文が施されている。32は複合口縁の大型壺。器壁が分厚く、重厚なつくりである。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部は丸みをもたせておさめる。頸部に扁平な突帯を貼り付け、刷毛原体により左下がりの刻目文を施している。調整は外面が刷毛目調整のちミガキ状の丁寧なナデ、内面が刷毛目調整のちナデである。33は大型壺の底部と考えられ、外底面は若干凸レンズ状を呈する。内面は器壁の剥落が著しい。34は口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、内外面ともに横ナデが施されている。35・37は壺とすべきか甕とすべきか躊躇したが、頸部のしまり具合や内外面を丁寧にナデていることなどから壺と判断した。両者とも口縁部内面を若干肥厚させている。また、この2個体は同一個体の可能性もある。

38~40・42・47・48は小型丸底壺である。38はいわゆる小型丸底埴と呼ばれるものであり、口縁部内外面には丁寧な横ナデが施されている。39・42は胎土が精選されており、ミガキ状の調整も一部認められる。精製器種の部類に入るものであろう。40は口縁部が長く、内湾気味に立ち上がる器形であり、胎土・調整ともに粗雑である。47はミニチュア土器の可能性もある。頸・胴部境界に段が形成されており、内外面ともに丁寧なナデが施されている。48は底部で、胎土は精選されており、内外面ともに丁寧なナデが施されている。

41・43~46・49~56は甕である。41は小型甕で、外反する短い口縁形態を呈する。器壁が薄く、内外面ともに丁寧なナデもしくはミガキの痕跡が認められる。43は内湾する口縁形態を呈する特異な甕である。外面は丁寧にナデられているが、内面はケズリ痕跡が明瞭である。44は胴が張る形態であり、内外面に単位の細かい刷毛目調整が施されている。胎土は精選されており、丁寧なつくりであるが、外面には炭化物が顕著に付着している。45・46は倒卵形の器形で、口縁部は「く」の字状に外反する。45は外面に粗い刷毛目、46は細かい刷毛目が縦方向に施されている。49~54も倒卵形の胴部に「く」の字に外反する口縁部が付くタイプである。49は口縁部外面にナデによる弱い稜が形成されており、布留系甕の影響を受けた可能性もある。50は口縁部が短く、器壁が分厚く、胎土・調整ともに粗雑である。51は口縁部が強く外反する形態を呈する。器壁は薄く仕上げられ、胎土も精良である。外面には細かい刷毛目調整が施されており、内面はケズリ痕跡が顕著に認められる。52は外面にタタキが施されており、形態的にも伝統的V様式甕と呼称されるものであろう。口縁部は短く、直線的に外反する形態であり、胴部外面には刷毛目調整のち右上がりのタタキ、内面には刷毛目調整とケズリ痕跡を認めることができる。胴部上位を中心として炭化物の付着が著しい。53はほぼ完形に復元された個体である。口縁部が長く直線的に外反し、底部は凸レンズ状を呈する。外面には粗い刷毛目調整が縦方向に施されており、内面はナデ調整である。胴部中位を中心として炭化物の顕著な付着を認めることができる。典型的な在地系甕と言えるだろう。54は全体的に器壁が厚いが、胎土は比較的精良で、内外面ともに丁寧なナデが施されている。

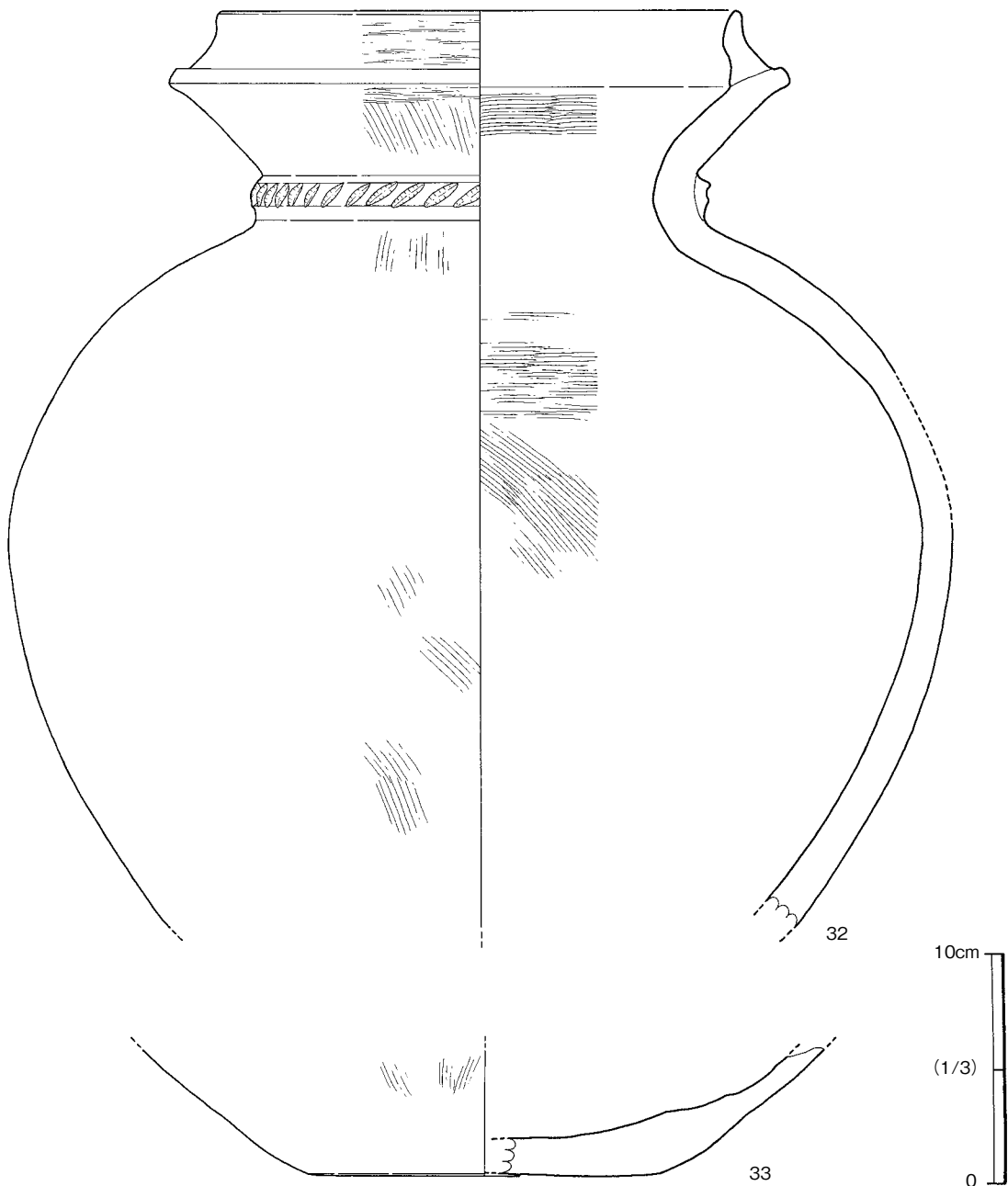
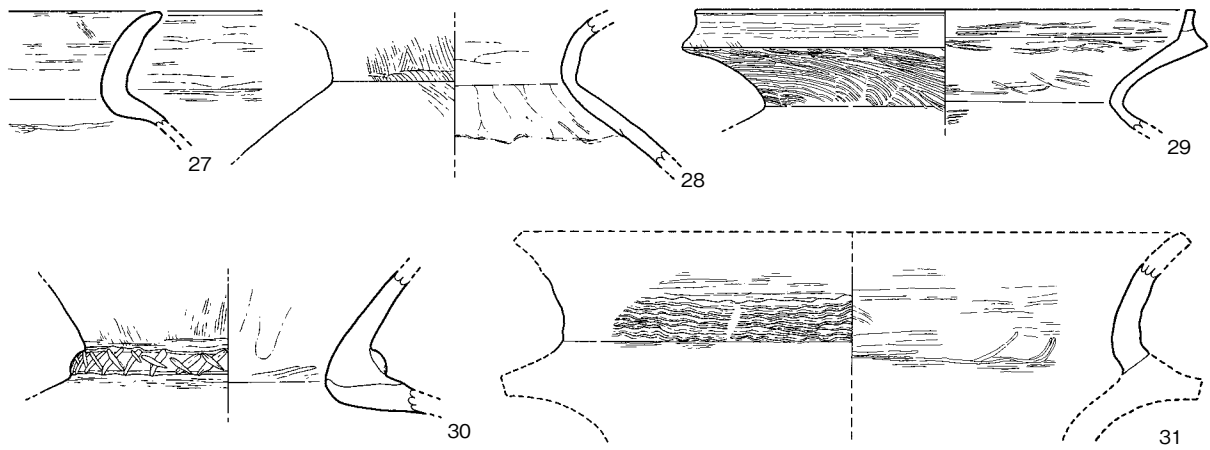


图12 II-a区遺物包含層出土遺物 (1)



图13 II-a区遺物包含層出土遺物 (2)

55は口縁部が強く外反する形態で、口縁部内面に明瞭な稜が作出されている。器壁がたいへん薄く仕上げられており、調整も丁寧である。外面に炭化物の付着が顕著に認められる。56は外面に平行なタタキ目が認められる。内面の調整は刷毛目調整のちナデ。肩部しか残存していないが、おそらく伝統的V様式甕に比定されるものであろう。

57・58は壺。57は頸部がしまり、長く外反する口縁部が付される。外面頸部付近には縦方向の、その下には横もしくは斜め方向の刷毛目が施されている。58はほぼ完形に復元された個体である。口縁部が若干内湾気味に立ち上がり、底部は丸底である。外面には丁寧なミガキ、内面には細かい刷毛目調整が横もしくは斜め方向に施されている。

59～69は甕口縁部である。基本的には口縁部が「く」の字状に強く屈曲するものであるが、68は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、69は口頸部と胴部がなめらかに移行する形態を呈する。また59は頸部に沈線状の区画が施され、62は口縁部外面に縦方向の刷毛目調整が施されている。

70・71は形態的特徴から古墳時代中期以降に位置づけられる甕である。いずれも口頸部から胴部へなめらかに移行する形態である。両者とも内面ケズリ痕跡が顕著である。

72～78は山陰系甕形土器。いずれの資料も口縁部内外面に丁寧な横ナデを施している。75以外は口縁外面に炭化物が顕著に付着している。

79・80は甕の胴部～底部資料である。79は外面刷毛目調整ならびに左上がりのタタキ痕、内面斜めもしくは横方向の細かい刷毛目調整が施されている。80は丸底の底部であり、外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはケズリ痕が認められる。また80には煤が顕著に付着している。

81～96は高杯もしくは台付鉢脚部である。81は杯部屈曲部が下位にあり、口縁部が直線的に立ち上がる形態で、口縁部内外面に丁寧な横ナデが施されている。82は81と同一形態と推定される。83～85は杯部下半から脚部にかけての資料である。いずれも内湾気味に立ち上がる口縁部に移行するものであると考えられる。86は台付鉢の脚部と考えられる。外面に縦方向のミガキが施されている。88～90は脚部である。88は裾広がりの形態であるのに対して、89・90は端部で強く屈曲する。いずれも胎土は精選されており、内外面とも丁寧なナデもしくはミガキが施されている。91～93は口縁部が外湾しながら立ち上がる形態で、弥生時代終末～古墳時代初頭に該当する資料である。91は屈曲部の稜があいまいで、口縁部が長く発達しており、口縁部内面には暗文が若干認められる。92・93は91と比較して口縁部が短い。いずれも内外面に暗文を密に施している。94は杯部の屈曲が下位にあり、発達した口縁部が付く。器壁は薄く、胎土も精選されている。95は弥生終末～古墳初頭高杯の脚部。円形透かし孔が4箇所施されている。96は口縁部が短く、屈曲部の稜もあいまいである。若干特異な形態であるが、胎土は精選されており、調整も丁寧である。

97・98は須恵器杯蓋、99は土師器鉢である。97・98ともに天井部と体部境の稜が明瞭に突出している。99は内外面ともに丁寧なナデが施された鉢である。

100～105は底部であり、100・104・105は壺の、101～103は甕の底部であると考えられる。100は若干尖り気味の丸底、104・105は若干突出気味の小底、そのほかはほぼ平底である。104の外面には暗文状の縦ミガキが施されている。

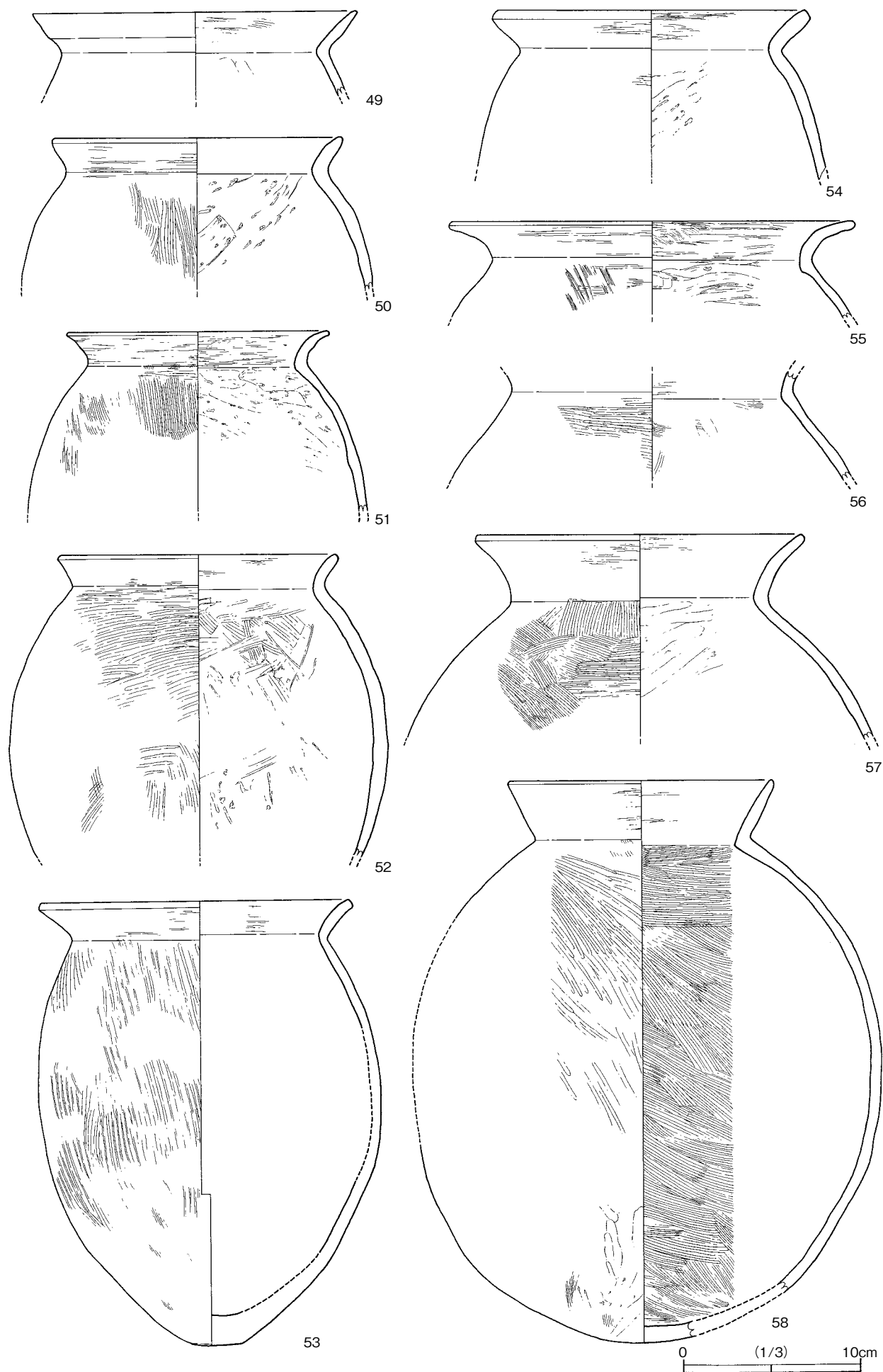


图14 II-a区遺物包含層出土遺物 (3)

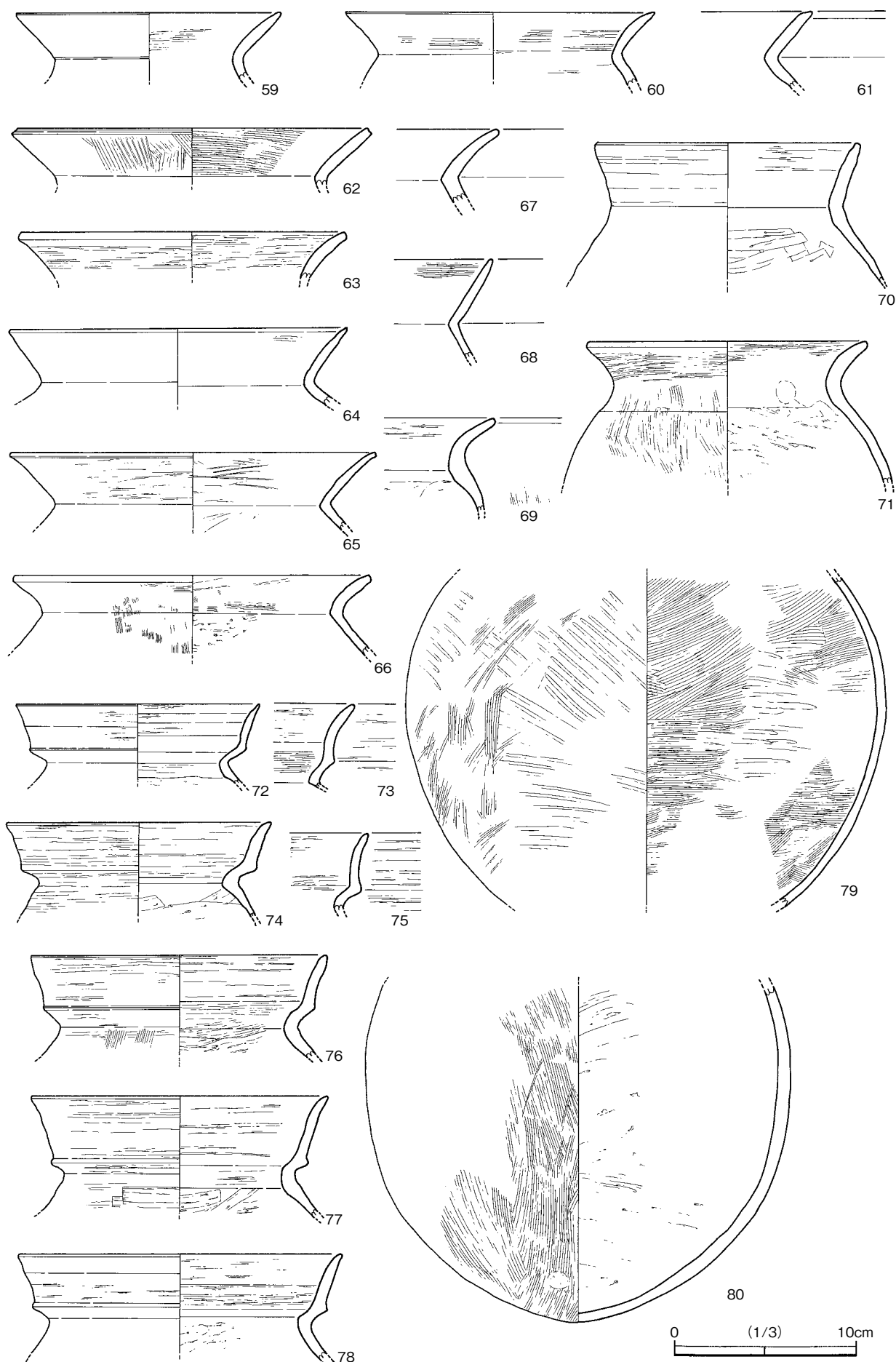


图15 II-a区遺物包含層出土遺物 (4)

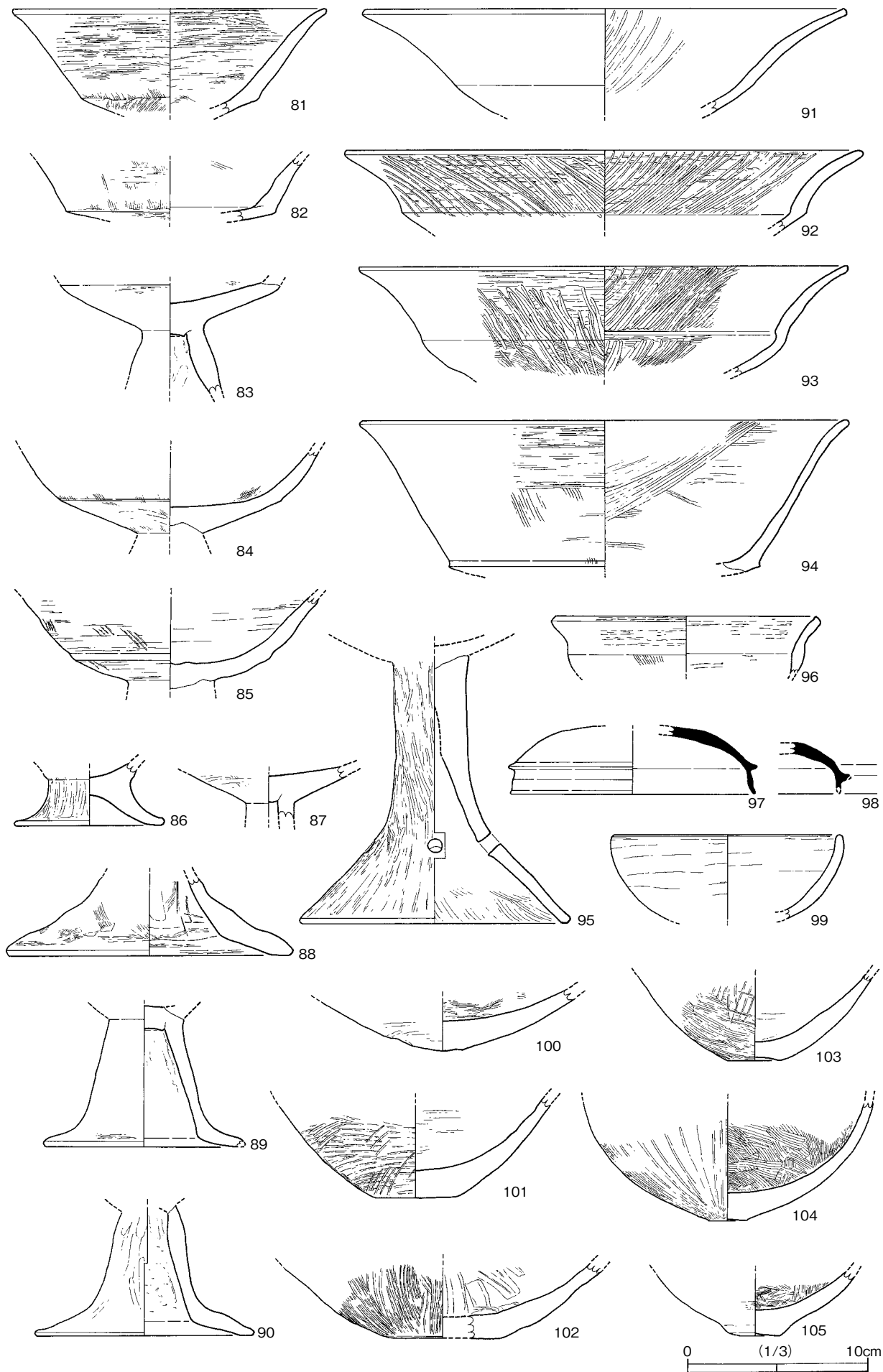


图16 II-a区遺物包含層出土遺物 (5)

(3) Ⅲ-b区河川跡出土遺物 (図17～図20、図版26～34)

106～108は弥生土器である。106・107は甕で口縁部が「く」の字状に強く外反する。108は壺の肩部であると考えられ、台形状の突帯を貼り付ける。弥生時代中期の所産であろう。

109～115は壺である。109は口縁部が短く肥厚する形態であり、内外面ともに丁寧なナデが施されている。110は口縁部が直線的に立ち上がる器形で、外面に弱い稜が形成され、口縁部内外面には丁寧な横ナデが施されている。111・112は小型丸底土器である。111はサイズからしてミニチュア土器の部類に入る可能性がある。赤色顔料の塗布が部分的に認められる。112は小型丸底埴の口縁部であり、内外面に丁寧な横ナデが施されている。113は二重口縁壺に比定できる。器面の摩滅が著しく、調整等は不明瞭。114・115は口縁外面に稜が認められ、内部端面が面取りされている。

116～125は甕である。116は口縁内面端部をナデによって凹ませている。117は外面に右上がりのタタキが施され、内面にはケズリ痕跡が顕著である。畿内系の甕であろう。118・120・121はともに口縁部が「く」の字に強く屈曲する形態であり、いずれも口縁部内外面には横ナデ、胴部外面には縦刷毛、内面にはケズリ痕跡が認められる。119は口縁部が外湾しながら直立気味に立ち上がる器形であり、口縁部内外面には丁寧な横ナデが施されている。122・124は口頸部から胴部にかけてなめらかに移行する器形を呈し、いずれも胴部に粗い刷毛目調整が施されている。123は口縁部が若干内湾気味に立ち上がる。器壁は分厚い。125はほぼ完形に復元できた個体である。口縁部は外反しながら立ち上がり、頸部はしっかりとしまっている。底部は丸底である。口縁部内外面には横ナデ、胴部外面には刷毛目調整、胴部内面にはケズリ痕跡が顕著に認められる。底部から胴部中位にかけて煤の付着が顕著に認められる。

126・127は山陰系の甕である。いずれも器壁が薄く、丁寧なつくりである。128は布留式の甕であろう。器壁が薄く、口縁内面端部が肥厚している。横ナデの痕跡が顕著。

129～158は高杯である。129～139は杯部で、135以外は口縁部が外反気味に立ち上がる形態を呈する。129は口縁部が斜め上方に若干外反気味に立ち上がる。130は口縁端部が短く外反する形態であり、内面には黒班が残されている。131・132は口縁部中位でふくらみもち、端部が若干外反する形態であり、132には赤色顔料の痕跡が認められる。133・134は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。いずれも口縁部内外面にヨコナデが施されており、丁寧なつくりである。135は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形で、内外面ともに横ナデの痕跡が明瞭に残る。136は杯屈曲部が明瞭に突出し、三角形の突帯状を呈している。

140～147は脚部である。140は短脚であり、裾部が強く屈曲する。141・142は裾部が「ハ」の字状に強く屈曲する形態で、両者とも内外面に丁寧なナデを施している。143は脚端部が広く接地する形態であり、内面には横方向のケズリ調整が明瞭に残る。145は他の個体が橙色系を呈するのに対し、茶色がかった黄橙色を呈し、器壁が厚く鈍重なつくりである。146は上端部に刻目を施しており、杯部との接合がより強固となる工夫が為されている。147は裾部が強く屈曲し、接地面が広い。内面には横方向のケズリ痕跡が明瞭に残されている。

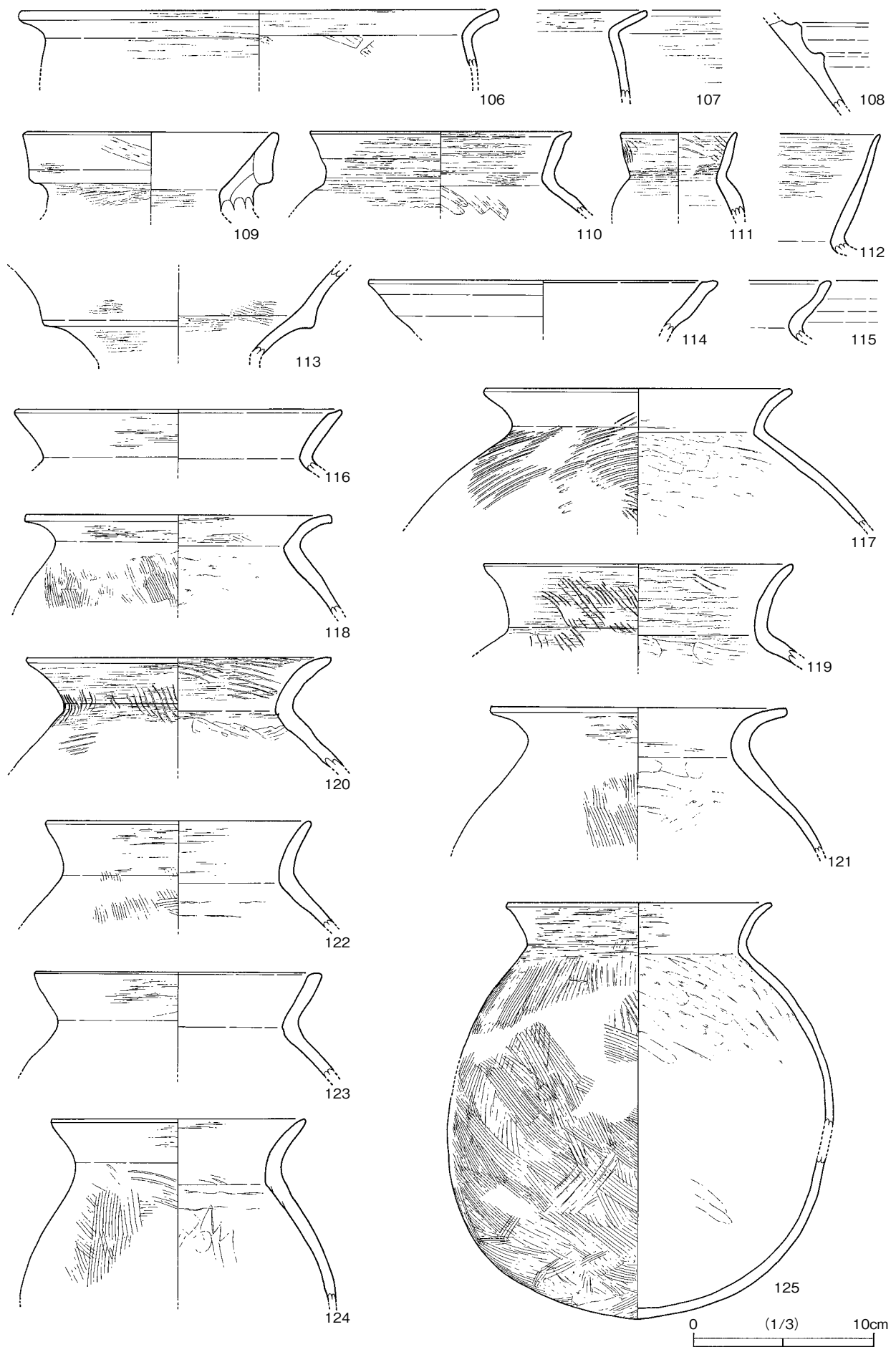


图17 Ⅲ-b区河川跡出土遺物 (1)

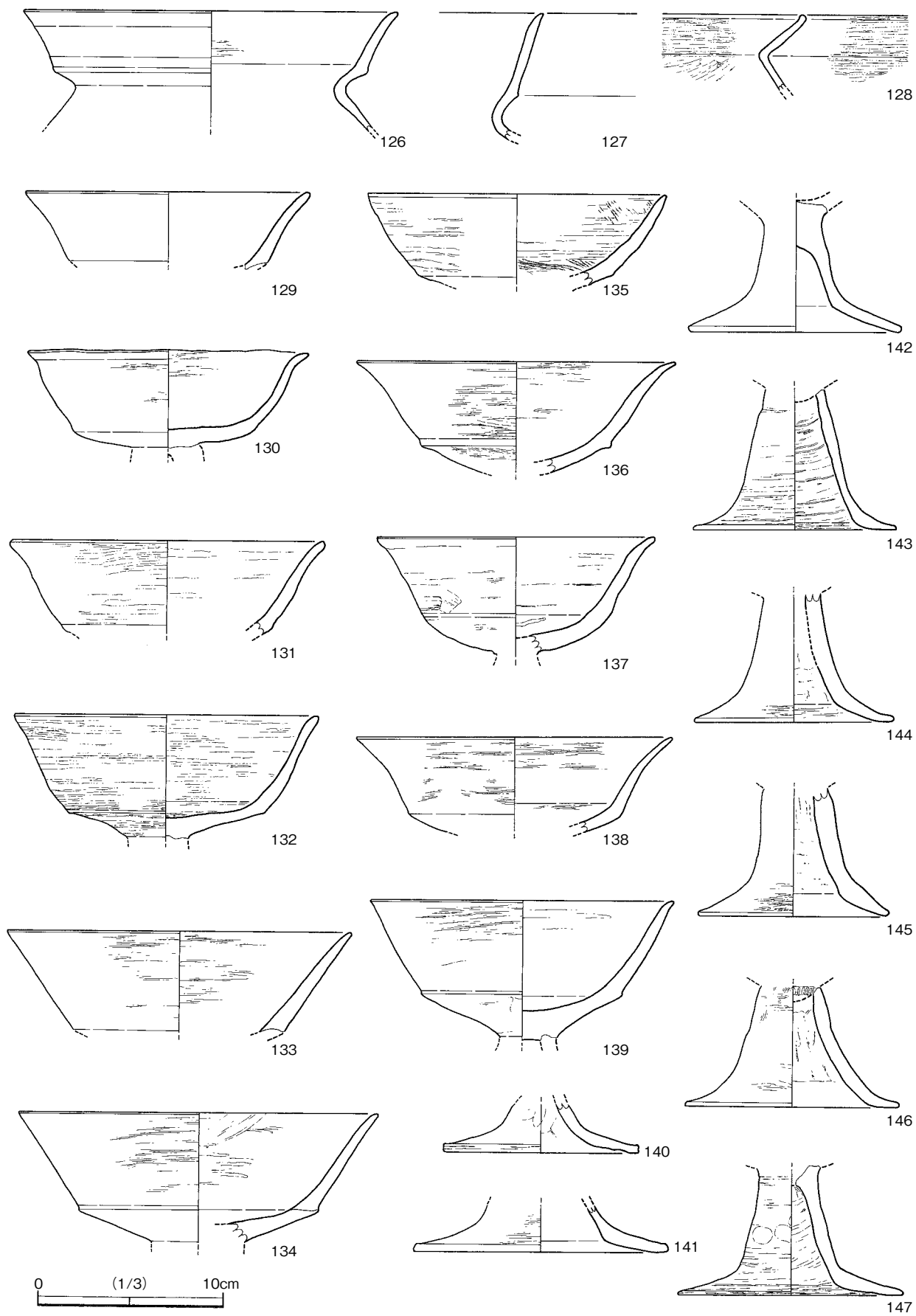


图18 Ⅲ-b区河川跡出土遺物 (2)

148～151・154は杯部であり、148・149・151・154は杯部下半の稜が明瞭であるのに対して、150は不明瞭である。150は器壁が厚く、特異な形態である。内面に横方向の刷毛目調整痕が残存する。151は外底部に半円形の粘土塊が形成されており、杯部との接合がより強固となる工夫が為されている。154も151と同様の技法により、杯部と脚部の接合がおこなわれている。

152・153・155～158は杯部から脚部にかけて良好な状態で残存する資料である。152は杯部下半で明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる器形であり、内面にはミガキ調整痕跡が認められる。153は杯部下位の屈曲がややあまく、口縁部は内湾気味に立ち上がる。調整は外面が刷毛目調整のちナデ、杯部内面はナデ、脚部内面には横方向のケズリ痕跡が認められる。155は脚部に透かし孔が3箇所施されており、全体的に器壁が薄く精良なつくりである。156は全形がうかがえる個体である。口縁部がなめらかに外反し、脚部は細く、裾部で強く屈曲する。外面ならびに杯部内面には丁寧な横ナデが施され、脚部内面にはしぼり痕が認められる。157はほぼ完形に復元された個体。口縁部は直線的に立ち上がり、脚部はために作られている。内外面ともヨコナデ調整が為されているが、脚部内面にはケズリ痕跡が認められる。158はやや低脚で、裾部の屈曲が著しい。

159～164は弥生土器の底部である。159は高台状の張り出しをもつ底部形態で、小型鉢の一部であると考えられる。160は若干上げ底を呈するが、その他の個体についてはほぼ平底である。また、161については壺底部の可能性が高いが、その他については弥生時代中期甕の底部と判断される。

165～174は鉢である。165は浅い皿形を呈する。内外面ともにミガキもしくは丁寧なナデが施されている。166は口縁部が直立気味に立ち上がる形態であり、内外面とも炭素を吸着させ、灰色を呈する。167・169～174は内湾する体部を有するものであるが、169・170に関しては口縁端部を若干外反させている。色調は168・170・171・173・174が橙色、169・172が褐色を呈しており、後者については炭素を吸着させ、色調を意図的に黒色化させている。またいずれの個体も内外面とも丁寧に磨かれており、精良なつくりである。168は口縁部を有するものであり、器壁がきわめて薄く仕上げられている。内外面ともナデ痕跡が認められる。

175～179は須恵器。175は甗であろう。胴部中位に波状文が施されている。176～178は杯蓋で、いずれも天井部と体部境界の稜が明瞭である。天井部には回転ヘラケズリ痕が認められる。これら杯蓋は5世紀後半～6世紀初頭に比定できるものであろう。179は古代の須恵器で、断面台形の高台を有する。外面に自然釉が付着。

180～188はミニチュア土器である。180～186は鉢であり、内外面ともに指オサエの痕跡が顕著。187は壺形を呈し、頸部が意図的に打ち欠かれている可能性がある。内外面とも指によるナデの痕跡が顕著。188は底部が上げ底を呈しており、鉢を模したものと考えられる。

(4) Ⅲ-b区河川跡出土石製品 (図20、図版34・37)

189・190は姫島産黒曜石の剥片。189は横長の不定形剥片であり、背面には主に打面側からの剥離痕が形成されている。190は縦長の剥片で、左側縁に微細な剥離痕が認められる。使用痕剥片とすべきか。191は碧玉製管玉で、中央部が若干ふくらみをもつ。192は砂岩製の石斧であろうか。表面の風化がはげしく、敲打痕や研磨痕が不明瞭であり、石斧か否か判断が難しいところである。

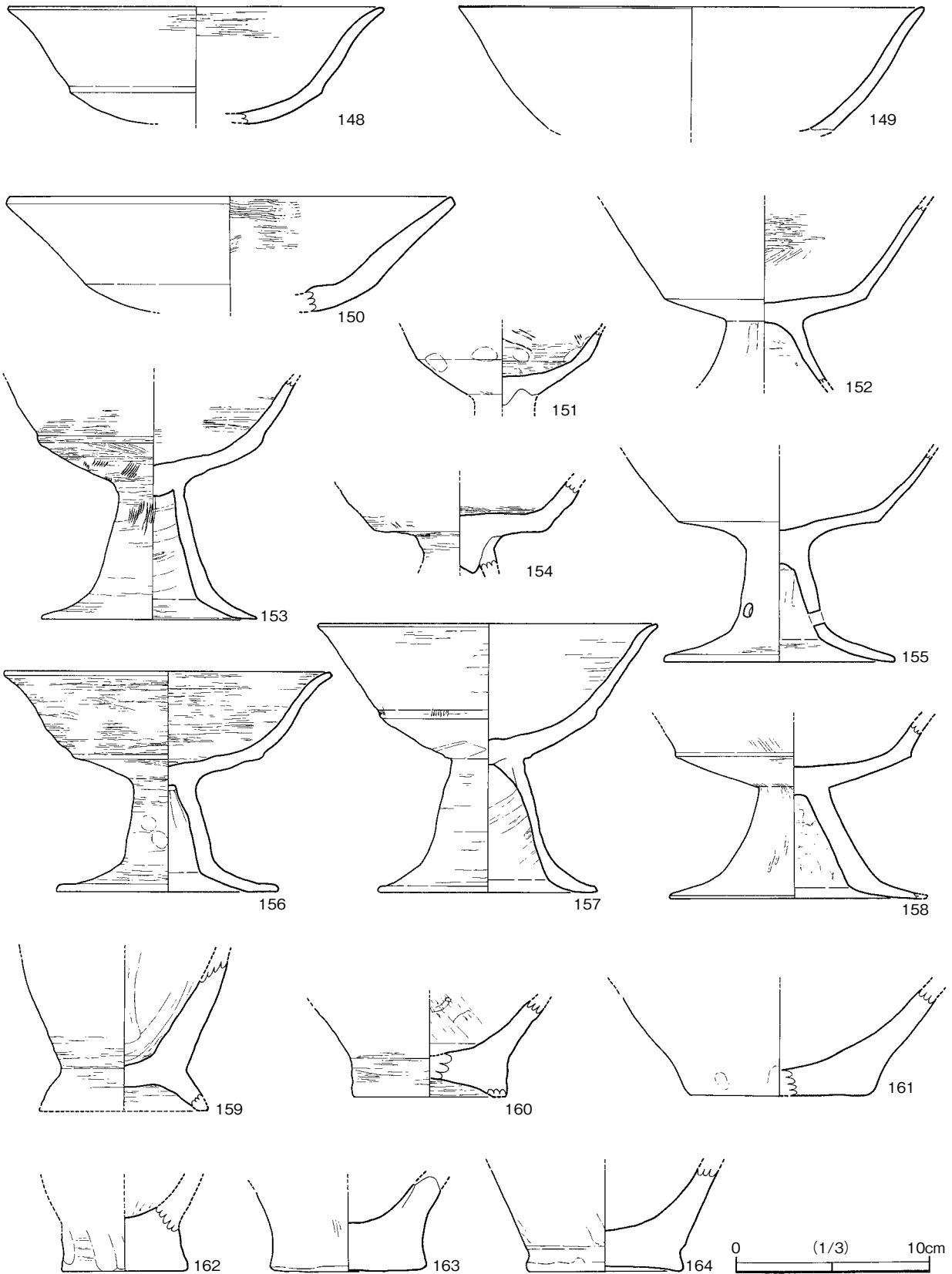


图19 Ⅲ-b区河川跡出土遺物 (3)

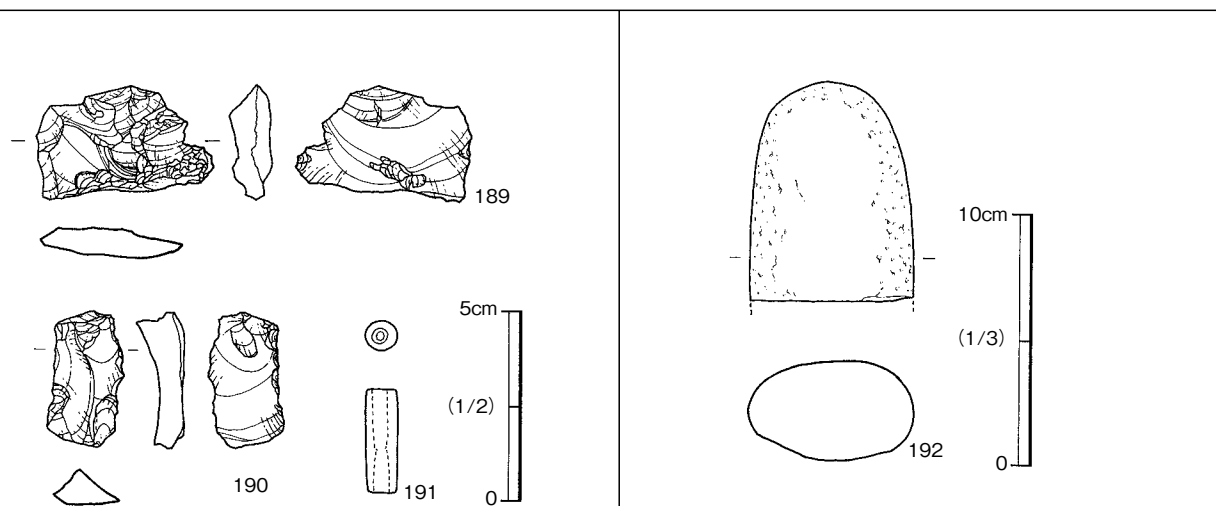
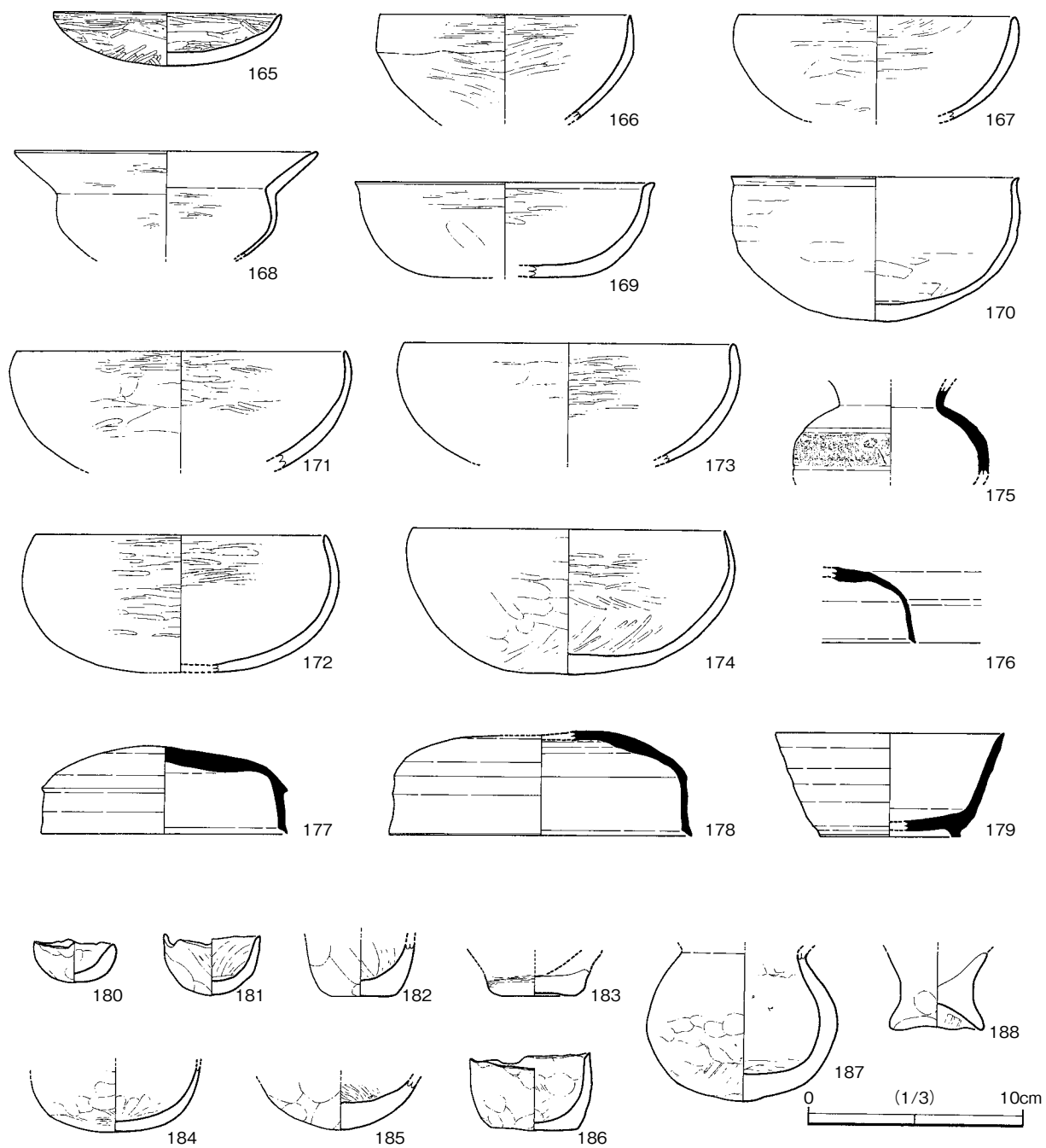


图20 Ⅲ-b区河川跡出土遺物(4)

(5) 木製品 (図21、図版38)

I 地区と II - a 地区を中心に自然木や部材の一部と考えられる資料が多く出土したが、いずれも図化に耐えうるものではなかった。193は唯一木製品と認定できるもので、平楯の未成品であろう。長さ15.4cm、幅26.9cm、厚さ4.8cmを測る。

(6) 中・近世期の出土遺物 (図22・23、図版35～37)

II - b 地区を中心として、近世期の遺物が多く出土した。これらは遺構に伴うものではなく、おもに攪乱層や造成土から出土したものである。ここでは出土地区を問わず、中・近世の陶磁器類や青銅製品についてまとめて記述をおこなう。

194・195は磁器であり、194は紅皿、195は濃い青色の呉須で文字書きがなされている。いずれも II - b 区出土。

196は土師器皿で、II - b 区の不明遺構より出土した。器壁は薄く、精良なつくりであるが、口縁部付近が厚く仕上げられている。外底面には回転糸切り痕が若干認められる。197は土師器碗であり、低平な高台が付されている。中世前半期のものと推定される。III - a 区の遺構検出中に出土。198は土師質足鍋で、II - b 区のピットより出土した。199は土師質の蓋。内外面とも摩滅しており、調整は不明瞭であるが、かすかにロクロナデの痕跡が認められる。II - b 区より出土。

200～207は陶器である。200は口縁部が直立する形態で、内面から外面中位にかけて藁灰釉が施されている。201・202はほぼ同一形態の碗で、いずれも藁灰釉を施す。203は皿形で、やはり内外面に藁灰釉が施釉。204は碗で底径が小さく、器壁も薄い。透明釉が施される。205は碗であり、高台のつくりがしっかりしており、器壁も厚い。206は200と同一形態であるが、器高が低い。内外面には藁灰釉が施されている。207は皿であり、灰釉が施される。200～203は萩焼、204は京・信楽系、205は肥前系、207はおそらく在地系である。これらの資料は204以外、すべて II - b 区から出土したものである。

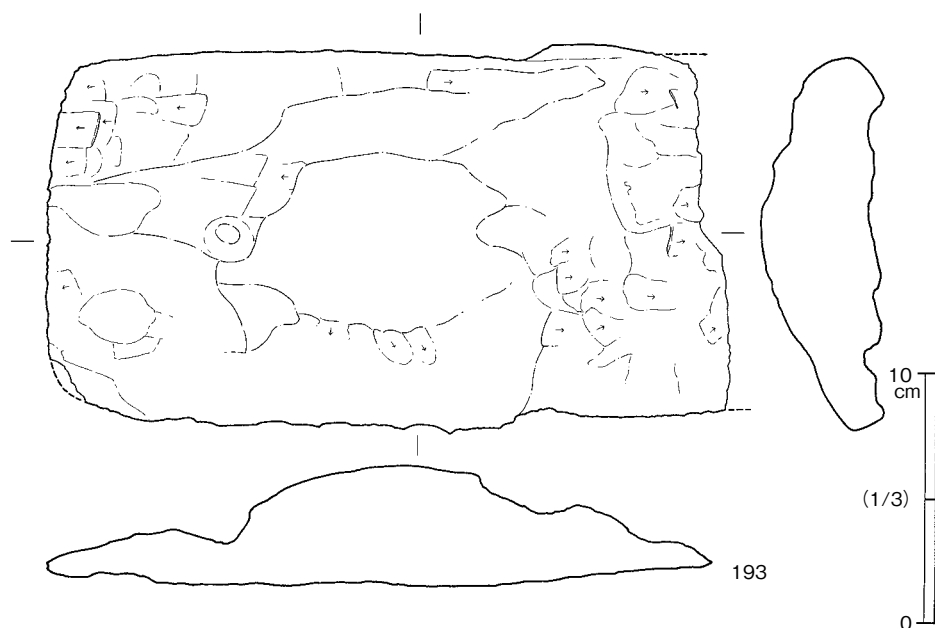


図21 木製品実測図

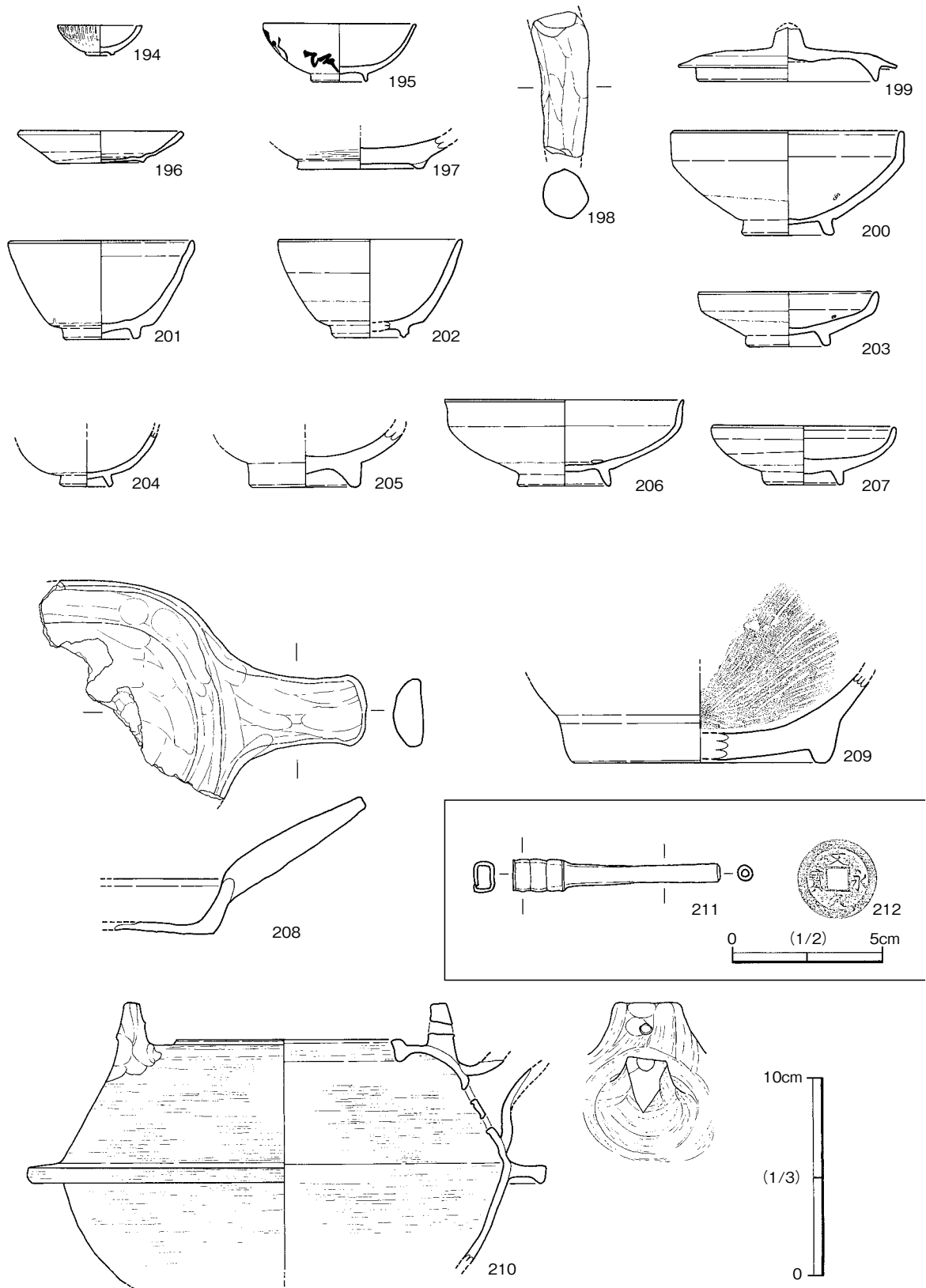


図22 中・近世の出土遺物

208は焙烙である。平面形は方形に近い形状になろうか。209は陶器播鉢で、内面には5条で1単位のおろし目が認められ、外面には鉄釉施釉。210は土師質の土鍋であり、体部中位に若干垂れ下がり気味の鏝が巡る。注口部および把手は貼り付けであり、注口内には4つの穿孔が施されている。外面には煤が付着する。208～210いずれもⅡ-b地区からの出土である。

211は煙管の吸口で、肩を持つものであるが、押しつぶされ断面扁平になっている。212は文久永宝であり、1863年（文久3年）に鑄造されたものである。211はⅡ-b区出土、212は表採。

213は瓦質土器の火鉢である。口縁外端部を玉縁状に肥厚させ、内外面ともに丁寧なナデを施す。Ⅰ-a区の黄灰色砂層から出土した。214はⅢ-b区の埋甕3である。瓦質焼成で、内外面ともに刷毛目調整ののちにナデを施している。

(7) 縄文土器（図23、図版36）

215はⅢ地区のピットより出土した。縄文時代後・晩期の粗製深鉢片と考えられる。内外面ともに条痕調整ののちナデを施す。

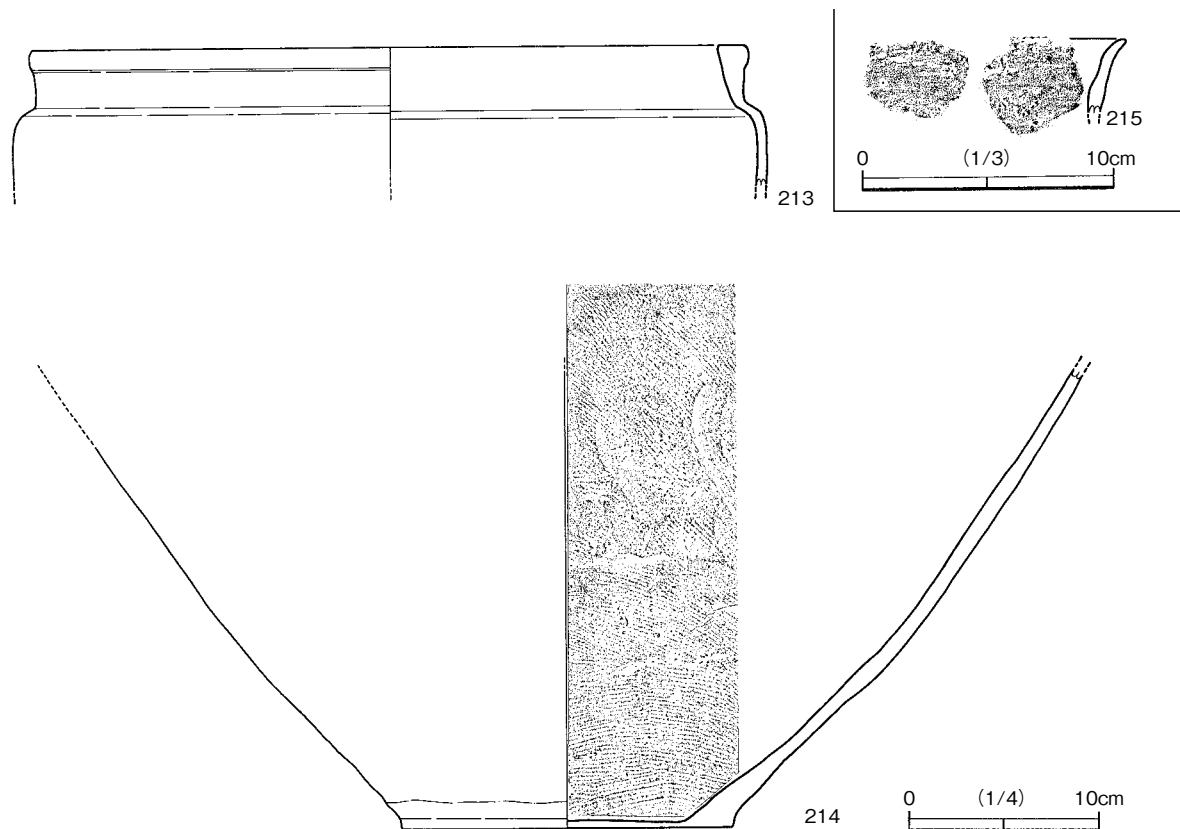


図23 縄文・近世の出土遺物

表1 出土土器観察表(1)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
試掘	1	包含層	土師器 甕	口径 (14.0) 器高 (10.3)	内面ケズリ。口縁部内面ハケ。 外面ハケ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	淡黄	
試掘	2	包含層	土師器 甕	口径 (18.3) 器高 (12.0)	内面ヘラケズリ。口縁部内外面 ナデ。外面ハケ目調整。	密。 砂粒多く含む。 やや軟質。	橙	
I	3	I-b区 D-3a	弥生土器 壺	口径 (24.6) 器高 (5.2)	内外面磨減調整不明。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
I	4	I-b区 D-3a	土師器 壺		内外面ナデ調整。屈曲部上部に 櫛描文を施文。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	暗灰黄	
I	5	I-b区 D-3a	土師器 壺		内外面ナデ調整。外面に山形文 を施文。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い黄橙	
I	6	I-b区 D-2G	土師器 壺		内面ケズリ。口縁部内面ナデ。 外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	灰白	
I	7	I-b区 D-3a	土師器 甕	口径 (20.6) 器高 (6.6)	内面ケズリ。外面ハケ、ナデ調 整。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	灰白	
I	8	I-b区 D-3c	土師器 甕	口径 (17.6) 器高 (5.8)	内面ケズリ状の指ナデ。口縁部 内外面ナデ。外面タタキ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄褐	
I	9	I-b区 D-3b	弥生土器 器台	器高 (10.0) 底径 (9.0)	内面ナデ、又指押さえ痕有り。 外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
I	10	I-b区 D-3a	土師器 器台	口径 (10.2) 器高 (2.2)	内面暗文状のミガキ。外面ナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	黄灰	畿内系器台
I	11	I-b区 C-3G	土師器 ミニチュア 鉢	器高 (1.1)	内外面指ナデ。又指押さえ痕有 り。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	灰黄	
I	12	I-b区 D-3G	土師器 ミニチュア 鉢	口径 (7.6) 器高 2.8 底径 (4.6)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。	鈍い黄橙	
I	13	I-b区 D-2G	土師器 ミニチュア 鉢	器高 (2.7) 底径 3.0	内外面指ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄	
I	14	I-b区 D-3a	土師器 ミニチュア 鉢	器高 (4.1) 底径 (2.6)	内外面指ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄	
I	15	I-b区 D-2G	土師器 高杯	器高 (5.3)	内外面ナデ。裾下部に4ヶ所穿 孔有り。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
I	16	I-a区 B-3	土師器 高杯	器高 (4.1) 底径 (10.6)	内面ケズリ後ナデ。外面ナデ。 一部ミガキ状のナデ調整有り。	密。 砂粒少量含む。	鈍い黄橙	
I	17	I-a区 B-2G	須恵器 杯蓋		内外面ロクロナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰	
I	18	I-a区 C-3G	土師器 高杯	器高 (8.1) 底径 (13.0)	内面ケズリ。裾部内面横ナデ。 外面横ナデ。指押さえ痕有り。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰白	
I	19	I-b区 D-2G	土師器 高杯	器高 (7.9) 底径 12.4	内面ナデ。外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
I	20	I-b区 D-3a	土師器 器台	器高 (2.7)	内面ナデ。外面指ナデ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
I	21	I-b区 D-3a	土師器 台付鉢?	器高 (4.0) 底径 (8.0)	内外面ナデ。屈曲部に穿孔有り。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
I	22	I-a区 C-3G	土師器 高杯	器高 (4.2) 底径 (20.4)	内面ケズリ。裾部内面ナデ。外 面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
I	23	I-b区 D-3a	土師器? 器台?	器高 (5.6) 底径 (22.2)	内外面ハケ後ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	灰黄褐	
I	24	I-b区 D-3c	土師器 甕	器高 (3.0) 底径 3.4	内面ナデ。外面ハケ後ナデ。底 部は凸レンズ状を呈し、ナデ調 整。	密。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	
I	25	I-a区 C-3G	弥生土器 甕	器高 (4.4) 底径 (7.0)	内外面ナデ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	弥生中期甕の底 部?

※法量の()内の数値は復元・残存値

表2 出土土器観察表(2)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
I	26	I-b区 D-3a	土師器 甕	器高 (4.6) 底径 7.2	内外面ナデ。接合痕有り。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	黄灰	
II	27	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 12.0 器高 (4.5)	内面ケズリ。口縁部内面横ナデ。 一部ハケ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
II	28	II-a区 包含層	土師器 壺	頸部径(9.6)	内面ナデ、指押さえ。外面ハケ 後ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
II	29	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 (19.8) 器高 (4.7)	内面横方向のハケ。外面左斜め 上方向のハケ。口縁部外面横 ナデ。接合痕有り。	密。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	
II	30	II-a区 包含層	土師器 壺	器高 (4.3)	内面ナデ。外面ハケ後ナデ。頸 部の貼付突帯に交差させた刻み 目を施す。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
II	31	II-a区 包含層	土師器 壺	器高 (3.1)	内面横ナデ。一部横ミガキ。外 面横ナデ。下部に櫛描文を施す。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄褐	
II	32	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 (22.0) 器高 (39.3)	内面ハケ後ナデ。外面ハケ。口 縁部ハケ後ナデ。頸部貼付突帯 に斜方向の刻目を施す。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い橙	
II	33	II-a区 包含層	土師器 壺	器高 (5.4) 底径 (15.0)	内面剥離調整不明。外面粗いハ ケの痕跡あり。底部は凸レンズ 状を呈する。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	暗灰黄	
II	34	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 (14.0) 器高 (3.9)	内外面横ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	淡黄	
II	35	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 15.2 器高 (5.2)	内面ミガキ、指押さえ痕あり。 口縁部内面横ナデ。外面横ナデ。 一部指押さえ痕あり。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄	外面煤付着
II	36	II-a区 包含層	土師器 壺		内外面ミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	黄灰	
II	37	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 (17.8) 器高 (7.6)	内面ハケ。口縁部内外面横ナデ。 外面一部に指ナデ調整あり。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄	35と同一個体の可 能性あり
II	38	II-a区 包含層	土師器 小型壺	口径 (11.2) 器高 (6.6)	内面ミガキ状のナデ。口縁部内 外面ハケ後ナデ。外面ケズリ後 ナデ。	密。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
II	39	II-a区 包含層	土師器 小型壺	器高 (6.9)	内面ケズリ後ナデ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
II	40	II-a区 包含層	土師器 小型壺	口径 (10.2) 器高 (12.0)	内外面ハケ後丁寧なナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	外面煤付着
II	41	II-a区 包含層	土師器 小型甕	口径 (11.4) 器高 (8.1)	内面斜め方向のミガキ。外面縦 方向のミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	外面橙 内面鈍い黄 橙	
II	42	II-a区 包含層	土師器 小型壺	器高 (10.4)	内面ナデ。指押さえ痕あり。外 面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	浅黄橙	
II	43	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (10.8) 器高 (9.9)	内面ケズリ。口縁部内外面ナデ。 外面ハケ後ミガキ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
II	44	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 14.2 器高 (11.7)	内面細密なハケ。口縁部内外面 ハケ後ナデ。接合痕有り。外面 細密なハケ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	外面煤付着
II	45	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (18.4) 器高 (21.2)	内面一部ケズリ、剥離が著しく 不明瞭。口縁部内外面横ナデ。 外面粗いハケ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	外面鈍い橙 内面鈍い黄 橙	
II	46	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (13.8) 器高 (13.9)	内面ケズリ後ナデ。口縁部内面 ハケ後ナデ。口縁部外面ナデ。 外面ハケ後一部ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い褐	
II	47	II-a区 包含層	土師器 小型壺	器高 (4.0) 胴最大径 (7.0)	内面ナデ。外面ハケ後ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	鈍い黄橙	ミニチュア土器の 可能性あり
II	48	II-a区 包含層	土師器 小型壺	器高 (2.4)	内面指ナデ。外面ハケ後指ナデ。 指押さえ痕有り。	粗。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	
II	49	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (18.0) 器高 (4.5)	内面指ナデ。口縁部内面ハケ後 ナデ。外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
II	50	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (16.2) 器高 (8.5)	内面ケズリ。口縁部外面横ナデ。 外面縦方向のハケ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	橙	外面煤付着

※法量の()内の数値は復元・残存値

表3 出土土器観察表 (3)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
II	51	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (14.6) 器高 (10.1)	内面ケズリ。口縁部内面横ハケ。口縁部外面ハケ後横ナデ。外面縦ハケ。	密。 細粒多く含む。	鈍い黄橙	
II	52	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (15.2) 器高 (16.8)	内面ケズリ後ハケ。口縁部内外面ナデ。外面タタキ後ハケ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	外面煤付着 伝統的V様式甕
II	53	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 17.1 器高 24.8 底径 2.6	内面丁寧なナデ。口縁部内面ハケ後ナデ。口縁部外面横ナデ。外面粗いハケ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	外面煤付着
II	54	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (17.0) 器高 (8.7)	内面ケズリ。口縁部内外面ナデ。外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	外面著しく煤付着
II	55	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (22.6) 器高 (5.4)	内面ケズリ。口縁部内面横ナデ後粗いハケ。口縁部外面横ナデ。外面横ナデ後粗いハケ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄褐	
II	56	II-a区 包含層	土師器 甕	器高 (5.7) 頸部径 (15.6)	内面ハケ後ナデ。外面タタキ、一部ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	灰黄褐	外面煤付着 伝統的V様式甕
II	57	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 (18.2) 器高 (11.2)	内面ケズリ状のナデ。口縁部内外面ナデ。外面縦ハケ後横ハケ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
II	58	II-a区 包含層	土師器 壺	口径 14.6 器高 31.3	内面横又は斜め方向のハケ。口縁部内外面横ナデ。外面ハケ後ミガキ。外面下部ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄	外面煤付着
II	59	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (14.4) 器高 (3.5)	内面ハケ後ナデ。外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
II	60	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (15.8) 器高 (4.0)	内外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	外面煤付着
II	61	II-a区 包含層	土師器 甕		内面ハケ後ナデ。外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	
II	62	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (18.8) 器高 (3.1)	内面横ハケ。外面縦ハケ。口唇部は面取り成形。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	外面煤付着
II	63	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (18.6)	内外面横ナデ。		鈍い黄橙	外面煤付着
II	64	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (18.4) 器高 (4.3)	内面ケズリ。口縁部内面ハケ後ナデ。外面ナデ	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄褐	外面煤付着
II	65	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (19.8) 器高 (3.9)	内面ケズリ後ナデ。口縁部内面粗いハケ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	
II	66	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (19.2)	内面ケズリ。口縁部内面ハケ後ナデ。外面ハケ後ナデ。		鈍い橙	
II	67	II-a区 包含層	土師器 甕		内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
II	68	II-a区 包含層	土師器 甕		内面ハケ後ナデ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄褐	布留系甕?
II	69	II-a区 包含層	土師器 甕		内面指押さえ後ケズリ。口縁部内面横ナデ。外面ハケ後横ナデ。	密。 砂粒少量含む。	浅黄橙	外面煤付着
II	70	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (14.2) 器高 (7.4)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄褐	外面煤付着
II	71	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (15.0) 器高 (7.7)	内面ケズリ。指押さえ痕有り。口縁部内外面横ナデ。外面ハケ後ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	外面鈍い黄 橙 内面橙	
II	72	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (13.2) 器高 (4.2)	内面ヘラケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。	黄灰	外面煤付着 山陰系甕
II	73	II-a区 包含層	土師器 甕		内面横方向のハケ。一部後にナデ。外面横方向のハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	褐灰	山陰系甕
II	74	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (14.4) 器高 (5.2)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	灰黄	山陰系甕
II	75	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (11.5) 器高 (4.1)	内外面横ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰白	山陰系甕

※法量の () 内の数値は復元・残存値

表4 出土土器観察表(4)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
II	76	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (16.2) 器高 (5.4)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。一部ハケ調整有り。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	山陰系甕
II	77	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (16.2) 器高 (6.6)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	外面煤付着 山陰系甕
II	78	II-a区 包含層	土師器 甕	口径 (17.6) 器高 (5.4)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	山陰系甕
II	79	II-a区 包含層	土師器 甕	器高 (17.8) 胴最大径 (26.0)	内面ハケ後ミガキ状のナデ。外面タタキ後ハケ。	密。 細粒多く含む。	橙	同一個体資料有り
II	80	II-a区 包含層	土師器 甕	胴最大径 (23.0)	内面ケズリ。外面ハケ。指押さえ痕有り。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	外面煤付着
II	81	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (17.2) 器高 (5.7)	内外面ハケ後横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
II	82	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (3.2) 坏屈曲径 (11.4)	内外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄褐	
II	83	II-a区 包含層	土師器 高杯	坏屈曲部径 (12.0)	内面ハケ後ナデ。脚部内面指ナデ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
II	84	II-a区 包含層	土師器 高杯	坏屈曲部径 (12.2)	内外面ハケ後ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い橙	
II	85	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (4.5) 坏屈曲部径 (13.0)	内面横ナデ。外面横ナデ後粗いハケ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
II	86	II-a区 包含層	土師器 低脚杯	器高 (3.4) 底径 (8.2)	脚部内面回転台ナデ痕跡有り。外面縦方向のミガキ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰黄	
II	87	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (2.4)	内面ナデ。外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い橙	
II	88	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (4.6) 底径 (15.4)	脚部内面ナデ、一部ケズリ。裾部内外面横ナデ。脚部外面ナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰黄	
II	89	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (7.8) 底径 (11.0)	内面絞り痕あり。裾部内面ナデ。外面丁寧なナデ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	灰黄	
II	90	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (7.2) 底径 (12.0)	内面ケズリ。外面指ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	
II	91	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (26.4) 器高 (5.8)	内面暗文状のミガキ、一部ナデ。外面ナデ、磨滅のため不明瞭。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
II	92	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (28.2) 器高 (4.4)	内外面横ナデ後縦方向の暗文状のミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄褐	外面煤付着
II	93	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (26.8) 器高 (6.0)	内外面横ナデ、ハケ後暗文状のミガキ。口縁部内外面横ナデ後暗文状のミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い褐	
II	94	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (26.6) 器高 (8.3)	内外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い黄橙	
II	95	II-a区 包含層	土師器 高杯	器高 (14.7) 底径 14.6	底部内面ナデ、粗いハケ。黒斑有り。外面ナデ、縦方向のミガキ。裾部に焼成前穿孔有り。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰黄	
II	96	II-a区 包含層	土師器 高杯	口径 (14.8) 器高 (3.1)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面ハケ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	浅黄	
II	97	II-a区 包含層	須恵器 杯蓋	口径 (13.4) 器高 (3.7)	内外面回転ナデ調整。	密。 砂粒少量含む。	灰	
II	98	II-a区 包含層	須恵器 杯蓋		内外面ロクロナデ調整。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	外面暗灰 内面灰	
II	99	II-a区 包含層	土師器 鉢	口径 (6.4) 器高 (4.6)	内外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄褐	
II	100	II-a区 包含層	土師器 壺底部	器高 (3.4)	内面ハケ。外面丁寧なナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰黄	

※法量の()内の数値は復元・残存値

表5 出土土器観察表 (5)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
Ⅱ	101	Ⅱ-a区 包含層	土師器 甕底部	器高 (5.1) 底径 (4.6)	内面粗いハケ後ナデ。外面タタキ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	灰黄	
Ⅱ	102	Ⅱ-a区 包含層	土師器 甕底部	器高 (3.8) 底径 (6.4)	内面ケズリ。外面縦方向のハケ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅱ	103	Ⅱ-a区 包含層	土師器 甕底部	器高 (4.6) 底径 (3.0)	内面ナデ。外面タタキ後ハケ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	灰黄褐	
Ⅱ	104	Ⅱ-a区 包含層	土師器 壺底部	器高 (6.5) 底径 (2.0)	内面ハケ。外面暗文状のミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
Ⅱ	105	Ⅱ-a区 包含層	土師器 壺底部	器高 (3.5) 底径 2.9	内面ハケ。外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	外面鈍い黄 橙 内面褐灰	鉢底部の可能性も 有り
Ⅲ	106	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕	口径 (26.3) 器高 (3.1)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	107	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (10.8) 器高 (4.7)	内外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	108	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 壺		内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	外面鈍い黄 橙 内面灰	
Ⅲ	109	Ⅲ-b区 河川	土師器 壺	口径 (14.1) 器高 (4.4)	内面横ナデ。外面横ナデ。口縁部に一部ケズリ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	110	Ⅲ-b区 河川	土師器 壺	口径 (14.4) 器高 (4.5)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	明赤褐	
Ⅲ	111	Ⅲ-b区 河川	土師器 小型壺	口径 (6.2) 器高 (4.6)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ後粗いハケ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	112	Ⅲ-b区 河川	土師器 小型壺	口径 (5.5) 器高 (5.5)	内外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	113	Ⅲ-b区 河川	土師器 壺	口径 (18.0) 器高 (4.9)	内外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	114	Ⅲ-b区 河川	土師器 壺	口径 (19.8) 器高 (2.9)	内外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	115	Ⅲ-b区 河川	土師器 壺		内外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	橙	
Ⅲ	116	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (17.8) 器高 (3.1)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	117	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (16.6) 器高 (7.5)	内面ケズリ。口縁部内外面ナデ。外面タタキ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	118	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (16.6) 器高 (5.1)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面ハケ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	119	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (17.0) 器高 (5.5)	内面ケズリ。口縁部内面横ナデ後粗い横ハケ。外面横ナデ後粗いハケ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	120	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (16.8) 器高 (6.0)	内面ケズリ。口縁部内面横ナデ後粗い横ハケ。接合痕有り。外面横ナデ後粗い縦ハケ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	121	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (16.4) 器高 (7.8)	内面ケズリ後ナデ。口縁部内外面横ナデ。外面粗い縦ハケ後ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	122	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (14.4) 器高 (5.4)	内面ケズリ後ナデ。口縁部内外面ナデ。外面ハケ後ナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	浅黄橙	
Ⅲ	123	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (15.8) 器高 (5.5)	内外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	124	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (13.8) 器高 (9.9)	内面ケズリ後ナデ。口縁部内外面ナデ。接合痕有り。外面粗いハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	125	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 14.4 器高 22.9	内面上半ケズリ、下半指ナデ。口縁部内面ハケ後横ナデ、外面横ナデ。外面粗いハケ。	密。 砂粒少量含む。	鈍い黄橙	胴部下半煤付着

※法量の () 内の数値は還元・残存値

表6 出土土器観察表 (6)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
Ⅲ	126	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (10.0) 器高 (6.2)	内外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	橙	山陰系甕
Ⅲ	127	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕		内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	淡黄橙	山陰系甕
Ⅲ	128	Ⅲ-b区 河川	土師器 甕	口径 (17.3) 器高 (4.1)	内面ケズリ。口縁部内外面横ナデ。外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	浅黄橙	布留系甕
Ⅲ	129	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (15.2) 器高 (4.1)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	130	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 15.0 器高 (5.2)	内外面ナデ。内面に黒斑有り。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	131	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (16.9) 器高 (4.9)	内外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	132	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (16.2) 器高 (6.5)	内外面横ナデ。外面にスリップ 付着。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	133	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (18.4) 器高 (5.3)	内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 硬質。	橙	
Ⅲ	134	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (19.2) 器高 (6.9)	内面ミガキ状のナデ。外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	135	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (15.9) 器高 (4.9)	内面横ナデ後粗いハケ。外面横 ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	136	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (17.0) 器高 (5.9)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	137	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (14.4) 器高 (6.2)	内面横ナデ、一部ケズリ。外面 横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	黄橙	
Ⅲ	138	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (16.8) 器高 (5.0)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	橙	外面煤付着
Ⅲ	139	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (16.2) 器高 (7.5)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	140	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (2.6) 底径 (10.4)	内外面ナデ。外面一部指押さえ 痕有り。	密。 砂粒少量含む。	鈍い橙	
Ⅲ	141	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (2.6) 底径 (13.6)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い橙	
Ⅲ	142	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (7.0) 底径 (11.4)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	143	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (7.5) 底径 (10.8)	内面ケズリ。裾部内面横ナデ。 外面横ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	144	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (6.6) 底径 (10.6)	内面ケズリ。裾部内面ナデ。外 面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	145	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (6.8) 底径 (10.2)	内面ケズリ。絞り痕有り。外面 ミガキ状のナデ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	146	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (6.5) 底径 (11.3)	内面ケズリ。外面ハケ目調整後 ミガキ状のナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	147	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (6.8) 底径 (12.0)	内面ケズリ。絞り痕有り。裾部 内面横ナデ。外面横ナデ。指押 さえ痕有り。外面スリップ付着。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	148	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (19.2) 器高 (6.0)	内外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	149	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (23.8) 器高 (6.3)	内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 硬質。	鈍い橙	
Ⅲ	150	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (23.0) 器高 (5.9)	内面ハケ目調整後ナデ。外面ナ デ。器壁が厚く特異な器形。	粗。 細粒多く含む。	橙	

※法量の () 内の数値は復元・残存値

表7 出土土器観察表 (7)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
Ⅲ	151	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (3.2)	内面横ナデ後粗いハケ。外面ナデ。内外面に指押さえ痕有り。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	152	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (8.9)	内面ミガキ状のナデ。脚部内面ケズリ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	153	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (12.2) 底径 (11.4)	内面横ナデ。脚部内面ケズリ、裾部横ナデ。外面横ナデ後一部ハケ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	154	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (4.5)	内面横ナデ後ハケ。外面横ナデ後一部粗いハケ。外面スリップ付着。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	155	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (10.5) 底径 (11.8)	内面ナデ。脚部内面ケズリ、裾部ナデ。外面ナデ。脚部穿孔あり。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	156	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 (16.8) 器高 (11.3) 底径 (11.4)	内面横ナデ。脚部内面絞り痕有り。外面横ナデ。一部指押さえ痕有り。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	157	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	口径 17.5 器高 13.8 底径 11.3	内面横ナデ。脚部内面ケズリ。外面横ナデ後一部ハケ。一部ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	158	Ⅲ-b区 河川	土師器 高杯	器高 (8.5) 底径 (12.6)	内面ナデ。脚部内面ケズリ。外面ハケ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	159	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕底部	器高 (7.7) 底径 (8.6)	内面ケズリ。底部内面横ナデ。外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅲ	160	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕底部	器高 (4.9) 底径 (7.8)	内面ケズリ。底部内面横ナデ。外面横ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	161	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 壺底部	器高 (5.5) 底径 (9.0)	内外面ナデ。外面指押さえ痕有り。	粗。 細粒多く含む。 硬質。	浅黄橙	
Ⅲ	162	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕底部	器高 (3.2) 底径 6.5	内面ケズリ。外面横ナデ後指ナデ。	粗。 砂粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	163	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕底部	器高 (4.1) 底径 (8.0)	内外面ナデ。	粗。 細粒多く含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	164	Ⅲ-b区 河川	弥生土器 甕底部	器高 (5.2) 底径 (7.8)	内外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	外面浅黄橙 内面鈍い 黄橙	
Ⅲ	165	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (10.5) 器高 2.5	内面ミガキ。外面ケズリ後横ナデ。ミガキ、粗いハケ調整を施す。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	166	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (11.6) 器高 (4.9)	内外面ナデ、ミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰	内外面に炭素を吸着させ黒色化
Ⅲ	167	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (12.8) 器高 (4.8)	内外面ミガキ状のナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	橙	
Ⅲ	168	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (14.0) 器高 (4.9)	内外面ナデ。	密。 細粒多く含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	169	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (13.8) 器高 3.9	内面ナデ、ミガキ。外面ナデ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	褐灰	内外面に炭素を吸着させ黒色化
Ⅲ	170	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 13.4 器高 6.6	内面ケズリ後ナデ。外面指ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	171	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (15.2) 器高 (5.4)	内面ミガキ状のナデ。外面ナデ。	粗。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	172	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 13.4 器高 6.4	内外面ミガキ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	褐灰	内外面に炭素を吸着させ黒色化
Ⅲ	173	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 (15.2) 器高 (5.5)	内面ミガキ (黒色磨研)。外面ケズリ後ナデ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	174	Ⅲ-b区 河川	土師器 鉢	口径 14.5 器高 6.7	内面ミガキ状のナデ。外面ナデ。底部ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	175	Ⅲ-b区 河川	須恵器 甗	器高 (4.0)	内外面ロクロナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰	胴部に波状文

※法量の () 内の数値は復元・残存値

表8 出土土器観察表(8)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
Ⅲ	176	Ⅲ-b区 河川	須恵器 杯蓋	器高 (3.5)	内外面ロクロナデ。	粗。 砂粒少量含む。 硬質。	内面灰白 外面灰	
Ⅲ	177	Ⅲ-b区 河川	須恵器 杯蓋	口径 11.4 器高 4.0	内面ロクロナデ。外面回転ヘラ ケズリ、ロクロナデ。	密。 細粒多く含む。 硬質。	灰	
Ⅲ	178	Ⅲ-b区 河川	須恵器 杯蓋	口径 (14.0) 器高 (4.8)	内外面ロクロナデ。天井部ヘラ ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	灰	
Ⅲ	179	Ⅲ-b区 河川	須恵器 杯身	口径 (10.6) 器高 (4.8) 底径 (6.6)	内外面ロクロナデ。自然釉有り。	密。 細粒多く含む。 硬質。	黄灰	
Ⅲ	180	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	口径 3.6 器高 2.0	内外面指押さえ。	密。 砂粒少量含む。 軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	181	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	口径 4.5 器高 2.8	内面ケズリ。外面ケズリ、指押 さえ痕有り。口縁の一部を打ち 欠く。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	182	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (2.5) 底径 3.1	内面ケズリ。外面指押さえ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	183	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (1.3) 底径 (4.6)	内面磨減調整不明。外面横ナデ。 底部内面ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	橙	
Ⅲ	184	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (3.0)	内外面指ナデ。底部ハケ後ナデ。	密。 細粒多く含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	185	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (2.3)	内面ケズリ。外面指押さえ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い黄橙	
Ⅲ	186	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	口径 5.5 器高 3.6 底径 4.0	内外面指押さえ。	粗。 砂粒少量含む。 軟質。	橙	
Ⅲ	187	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (6.9)	内面ケズリ後ナデ。外面ナデ、 指押さえ痕あり。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	浅黄橙	
Ⅲ	188	Ⅲ-b区 河川	土師器 ミニチュア 土器	器高 (3.5) 底径 (4.4)	内面剥離調整不明。外面指押さ え。底部内面ケズリ。	密。 砂粒多く含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅱ	194	Ⅱ-b区	磁器 紅皿	口径 (4.2) 器高 1.5 底径 (1.05)	内面、外面上部にかけて施釉。 外面から底部にかけ無釉。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土灰白	
Ⅱ	195	Ⅱ-b区	磁器 碗	口径 (7.6) 器高 4.3 底径 2.8	内外面ロクロナデ、施釉。外面 文様有り。高台下部釉剥ぎ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土灰白	
Ⅱ	196	Ⅱ-b区 不明遺構	土師器 皿	口径 7.9 器高 1.9 底径 4.3	内外面ロクロナデ。底部糸切り。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	内面灰白 外面浅黄橙	
Ⅲ	197	Ⅲ-a区	土師器 碗	器高 (1.6) 底径 (6.3)	内面ケズリ。外面、底部内面横 ナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	灰黄	
Ⅱ	198	Ⅱ-b区	土師質 足鍋脚部		ナデ調整。	粗。 細粒多く含む。 軟質。	浅黄橙	
Ⅱ	199	Ⅱ-b区	土師質 蓋	口径 8.8 器高 (2.7) 鏝部径10.8	内面ロクロナデ、磨減調整不明 瞭。外面ロクロナデ。	密。 砂粒少量含む。 やや軟質。	鈍い橙	
Ⅱ	200	Ⅱ-b区	陶器 碗	口径 (11.3) 器高 5.2 底径 (4.4)	内外面ロクロナデ。内面、外面 上部にかけ施釉。下部から底部 にかけ無釉。高台部ケズリ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土灰白	藁灰釉
Ⅱ	201	Ⅱ-b区	陶器 碗	口径 (9.1) 器高 4.9 底径 3.6	内外面ロクロナデ。高台部ケズ リ。内面から外面下部施釉。外 面下部から底部無釉。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部褐灰 胎土淡黄	藁灰釉
Ⅱ	202	Ⅱ-b区	陶器 碗	口径 (9.2) 器高 4.9 底径 (3.6)	内外面ロクロナデ。内面から外 面下部施釉。下部から底部無釉。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土浅黄	藁灰釉
Ⅱ	203	Ⅱ-b区	陶器 皿	口径 (8.8) 器高 2.7 底径 4.0	内外面ロクロナデ。高台部ケズ リ。内面から外面上部にかけ施 釉。外面から底部無釉。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土浅黄橙	藁灰釉
Ⅰ	204	Ⅰ-b区	陶器 碗	器高 (2.8) 底径 2.2	内外面ロクロナデ。高台部ケズ リ。内面から外面下部にかけ施 釉。外面下部から底部無釉。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部灰白 胎土灰白	透明釉
Ⅱ	205	Ⅱ-b区	陶器 碗	器高 (2.6) 底径 5.2	内外面ロクロナデ。内外面施釉。 高台下部釉剥ぎ。	密。 砂粒少量含む。 硬質。	施釉部浅黄 胎土灰白	透明釉

※法量の()内の数値は復元・残存値

表9 出土土器観察表 (9)

地区	遺物番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
II	206	II-b区	陶器 碗	口径 (11.7) 器高 4.3 底径 4.6	内外面ロクロナデ。高台部ケズリ。内面から外面下部にかけ施釉。外面下部から底部無釉。	密。砂粒少量含む。硬質。	施釉部灰白 胎土淡黄	藁灰釉
II	207	II-b区	陶器 皿	口径 (9.0) 器高 3.9 底径 3.8	内外面ロクロナデ。高台部ケズリ。内面から外面下部にかけ施釉。外面下部から底部無釉。	密。砂粒少量含む。硬質。	施釉部 オリーブ褐 胎土浅黄橙	土灰釉
II	208	II-b区	土師質 焙烙	器高 6.8	内外面指ナデ、横ナデ。底部ケズリ。	密。砂粒少量含む。硬質。	鈍い黄橙	
II	209	II-b区	陶器 播鉢	器高 (4.5) 底径 (12.4)	外面ロクロナデ。内外面施釉。高台下部釉剥ぎ。	密。砂粒少量含む。硬質。	施釉部灰赤 胎土鈍い橙	
II	210	II-b区	土師質 土鍋	口径 (11.4) 器高 (12.2)	内面横ナデ。外面横ナデ、指ナデ。指押さえ痕有り。外面にスリップ付着。	密。砂粒少量含む。やや軟質。	鈍い橙	外面に煤付着
I	213	I-a区 C-3G	瓦質土器 火鉢	口径 (37.8) 器高 (7.4)	内外面ナデ。	密。砂粒少量含む。硬質。	外面灰白 内面灰	
III	214	III-b区 埋甕3	瓦質土器 埋甕	器高 (24.3) 底径 17.4	内外面ハケ後ナデ。	密。砂粒少量含む。硬質。	鈍い黄橙	
III	215		縄文土器 深鉢		条痕調整のちナデ。	粗。砂粒多く含む。やや軟質。	灰黄	

※法量の () 内の数値は復元・残存値

表10 出土石製品観察表

地区	遺物番号	出土地点	器種	法量 (cm)	製作技法の特徴	石材	備考
III	189	III-b区 河川	剥片	長さ 3.0 幅 4.2 厚さ 1.0 重量 11.7g	打面側からの剥片剥離が数回行われたのち、不定形の横長剥片が剥出されている。二次加工等なし。	姫島産黒曜石	
III	190	III-b区 河川	剥片	長さ 3.6 幅 2.0 厚さ 1.3 重量 6.1g	縦方向、横方向からの剥片剥離が行われたのち、やや縦長の剥片が剥出されている。	姫島産黒曜石	左側縁に微細な剥離痕が認められ、使用痕の可能性あり
III	191	III-b区 河川	管玉	長さ 2.8 幅 0.9 厚さ 0.8 重量 3.3g	丁寧な研磨	碧玉	
III	192	III-b区 河川	石斧?	長さ 8.7 幅 6.4 厚さ 3.9 重量 380g	敲打調整および磨きがおこなわれている可能性があるが、器面の磨減が激しく不明瞭	砂岩	

※法量の () 内の数値は復元・残存値

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層、古墳時代中期の土器が多く出土した河川跡、近世の石垣、埋甕等を検出することができた。白石遺跡自体の調査は、これまで山口大学教育学部附属山口小・中学校内で配水管設置等の工事に先立ち、小規模な調査が繰り返されてきた。また、遺跡近辺の丘陵上には茶臼山石棺などの墳墓群が点在しており、有機的な結びつきを看取することができる。

本章では、過去におこなわれた白石遺跡の調査成果と、周辺遺跡の概況を踏まえて総括を行い、調査成果の意義を明らかにしたい。

(1) 既調査の概要と成果

山口大学教育学部の山口附属小・中学校構内で、埋蔵文化財の調査がはじめて行われたのは、昭和59年のことであった。附属小学校の運動場に複数のトレンチが設定され、竪穴住居、溝状遺構、遺物包含層などが検出され、古式土師器、木製品などが出土した（河村・森田：1985）。とりわけ木製品については、全国的にも希少な鳥形木製品が出土するなど、高い資料的価値をもっており、白石遺跡の重要性を強く認識させることとなった。その後、平成元年に附属幼稚園・小学校の校舎区域でトレンチ調査が実施され、竪穴住居、溝状遺構が検出（河村・古賀：1991）、平成2年には附属中学校構内で調査が行われ、縄文晩期、弥生時代終末期～古墳時代の遺物包含層が確認され（河村・古賀：1992）、遺跡の一端が明らかとなっている。

今回の調査で検出された遺物包含層は、弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物を多く含んでおり、附属小・中学校のそれと、時期的に近い。また、土質が黒褐色で粘性が強い点でも共通しており、その形成要因もきわめて類似したものであったと予想される。この包含層の広がりについては、今回の調査区では南西側に偏在しており、全面的なものではない。附属小学校運動場の調査では、北西端部に設けられたAトレンチで木製品を多く包蔵する古墳時代初頭の遺物包含層が確認されており、この成果を参考にすると、附属小学校運動場の北西側と本調査区の南西側をむすぶ地形の傾斜ラインが存在し、その部分に遺物包含層が形成されていた可能性が指摘できる。しかし、本調査区ではⅠ-b区包含層とⅡ-a区包含層との間に安定した基盤層が存在しており、南西側全域に包含層が形成されている訳ではない。おそらく部分的に小谷が刻まれるような複雑な地形を呈していたのであろう。

遺構については、今回の調査では弥生・古墳時代に該当する住居跡、土坑等を明確に確認することができなかった。附属小学校内では運動場南側で3棟、校舎北東側で1棟、計4棟の住居跡が確認されており、詳細な時期は明らかでないものの、弥生中期～古墳初頭期の所産であると考えられている。そのほか土坑等の存在も考慮すれば、当時の主要な生活域は本調査区の北側に存在していたと考えておくのが妥当であろう。

また、今回Ⅲ-b区で検出した河川跡についてであるが、規模や地形的な面から附属小学校・幼稚園内にその一部が存在することは間違いない。このことに関しては、附属幼稚園の北東側で検出された河川跡との関連が想定されるが、トレンチ調査の成果であるため、規模や時期について不明な点が多く、速断することはできない。

(2) 出土土器について

今回の調査で最も多く出土したのは、弥生時代終末～古墳時代初頭期の土器である。包含層から出土した資料であるため、一括性において良好なものではないが、型式学的考察を行うことにより、有意な情報を引き出したい。

まず、本調査で出土した資料の概況について述べる。壺に関しては出土数が少ないが、複合口縁壺は口縁部が外反して立ち上がるもの(31)、内傾気味に立ち上がるもの(32)の両者が存在し、在地系のものとして捉えられる。甕は在地系のもの(45・53など)が主体で、タタキメを有する畿内系甕(52・56)はごく少数であり、布留系甕(128)の出土も1点にとどまる。これに対して山陰系甕(72～78)の出土は非常に多い。高杯についてはほぼ在地系のもの(91～93)に限定されるが、器台に関しては畿内系のもものが1点のみ認められる(10)。なお、山陰系の鼓形器台は確認できなかった。

ところで、白石遺跡の他地点でも、弥生終末～古墳初頭の土器が検出されているが、最もまとまった資料は附属中学校A区5・6層出土土器(図24)である。そこでこの資料について概観し、今回調査

分との対比を試みる。

甕は在地系のもものが中心であるが、タタキメを残す資料が比較的多い(2・6・7・32)。これらの資料は、畿内の影響を受けたものと考えられるが、器形や器壁の厚さにおいて在地的な特色を持っている。また、典型的な庄内・布留式甕の出土は認められない。

これに対して山陰系甕は典型的なものが複数出土しており(15・16・23～26)、土器組成の中で確固たる位置をしめていると言えよう。さらに山陰系の土器として鼓形器台を挙げることができる(17)。

高杯は在地系のものに限定されるが、A区の南隣りに設定されたB区から畿内系の有段高杯が出土しており、特殊な例となっている。このほか小型丸底壺(19)や鉢(21)が出土しているが、他地域産

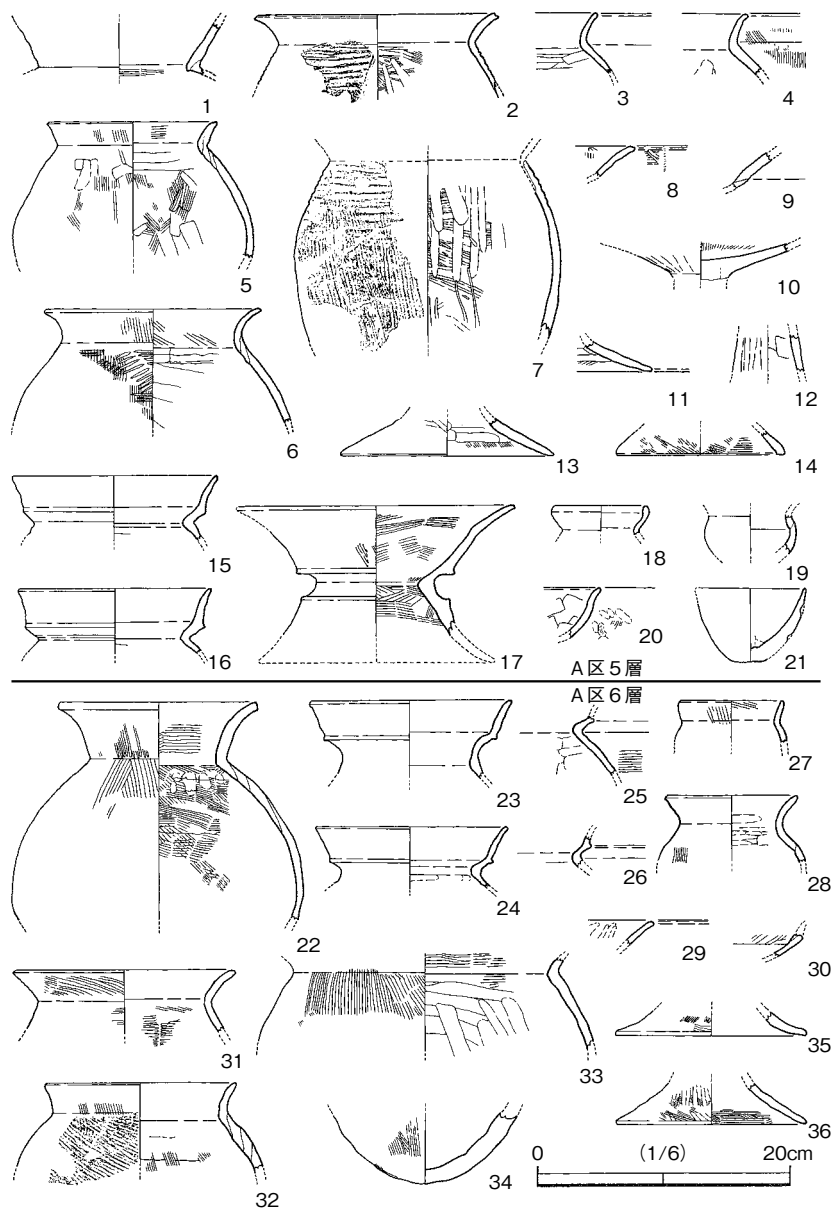


図24 教育学部附属山口中学校出土土器

と考えられるものは存在しない。

附属中学校A区5・6層出土土器については、分層されているものの明確な型式差・時期差をもっているわけではない。基本的な土器群の構成は在地系土器が主体であり、山陰系土器が一定量を占め、畿内系土器が少ない傾向を示しており、今回調査で得られた土器群と類似している。すでに指摘されているが、附属幼稚園・小学校を含めた構内遺跡では山陰系土器の割合が高く（河村・古賀：1992）、今回の調査でもこのことを傍証することができた。

こうした白石遺跡の土器群と対照的なのが湯田楠木町遺跡出土土器（図25）である。二重口縁の壺（1）、伝統的V様式系甕（8～13）、高杯（14～17・20）、器台（18・19）、鉢（23）などに畿内からの影響が強く看取され、山陰系の土器は鼓形器台（21）のみであり、在地系の土器も少ない。再整理を行った田畑直彦氏は、当土器群における畿内系土器の多さや、在地土器とは明らかに異なる胎土を有する資料の存在から、土器製作者の移住を想定している（田畑：2000・2001）。

白石遺跡と湯田楠木町遺跡の距離は、直線にして1.5kmしか離れておらず、近接した地域に異なった土器型式を使用する集団が居住していた可能性を指摘することができる。さらなる事例の積み重ねが必要であるが、両遺跡における土器様相の差は、山口盆地内における弥生時代終末～古墳時代初頭の社会動向を考察するうえで重要な意味をもっていると言えよう。

（3）周辺墳墓遺跡との関連

本遺跡北西側の鴻ノ峰山から派生する丘陵には、茶白山石棺・古墳、鴻ノ峰古墳群、糸米遺跡といった墳墓遺跡が点在している。特に茶白山石棺、糸米遺跡では弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑墓、

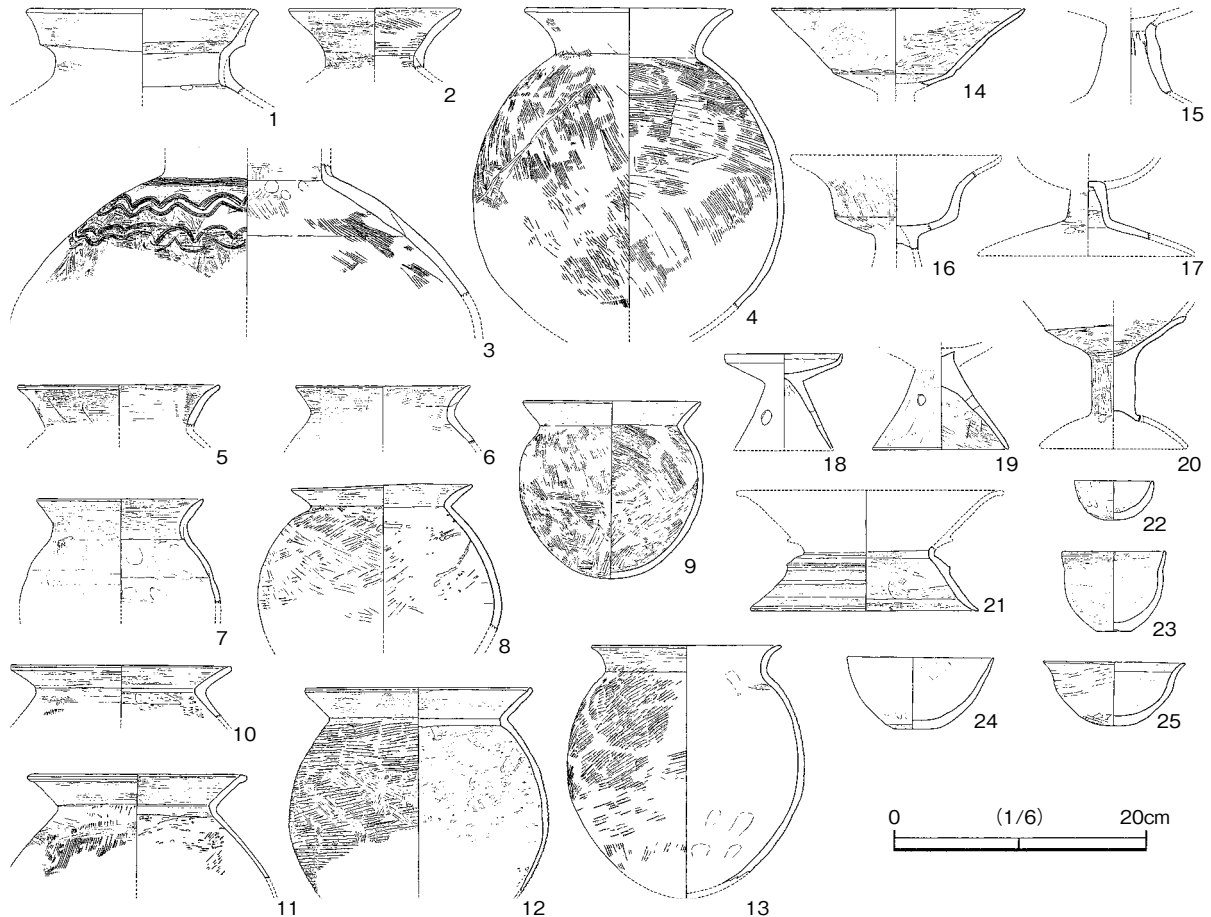


図25 湯田楠木町遺跡出土土器

箱式石棺墓、土器棺墓が確認されており、白石遺跡の中心時期に符号する。両遺跡とも、副葬品は貧弱であり、茶臼山石棺では碧玉製管玉、ガラス製小玉、糸米遺跡では鉄剣、碧玉製管玉が検出されているにすぎない。また、両遺跡とも在地系の壺を用いた土器棺が認められる。

山口盆地において最古の前方後円墳は新宮山1号墳であり、5世紀前半の築造であると考えられている。つまりこの時期まで、当地域では墓制の顕著な変革が認められず、弥生時代以来の伝統が踏襲されていたことになる。茶臼山、糸米の事例も同様である。他から隔絶した特定個人墓が存在せず、集団墓地の規範が守られていることは、地域社会の枠組みが未だ弥生的なものから脱していなかったことを示すものであろう。茶臼山石棺や糸米遺跡の墳墓は、白石の地に居住していた有力な集団が築いたものである可能性が高い。しかし埋葬施設や副葬品から見て、他集団と隔絶した立場にある人々の墓であったとは言いがたい。

(4) おわりに

今回の調査成果、過去の調査成果をもとに、白石遺跡における弥生時代終末～古墳時代初頭期の一端を素描してみた。その後、古墳時代中期まで集落が継続していたであろうことは、出土遺物や、今回検出された河川跡の存在からも明らかであるが、古代～近世前半期までの遺構、遺物の存在は不明瞭である。特に大内氏の居館が築かれていた室町時代後半については、教育学部附属構内遺跡でこの時期の土師器片がわずかに確認されているにすぎず、集落の存在を窺うことができない。大内氏居館と地理的に近接するにもかかわらず、この時期の集落が存在しないことは、地形的な問題を含め、検討されねばならない課題であろう。

引用・参考文献

- 河村吉行・森田孝一編 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』山口大学埋蔵文化財資料館 1985
- 河村吉行・古賀真木子編 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』山口大学埋蔵文化財資料館 1991
- 河村吉行・古賀真木子編 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』山口大学埋蔵文化財資料館 1992
- 田畑直彦 「山口市湯田楠木町遺跡の古式土師器」『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』山口大学埋蔵文化財資料館 2000
- 田畑直彦 「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ 2001

图 版



遺跡遠景（北より）



遺跡近景（Ⅰ・Ⅱ地区）



I-a区全景（北より）



I-b区全景（南西より）



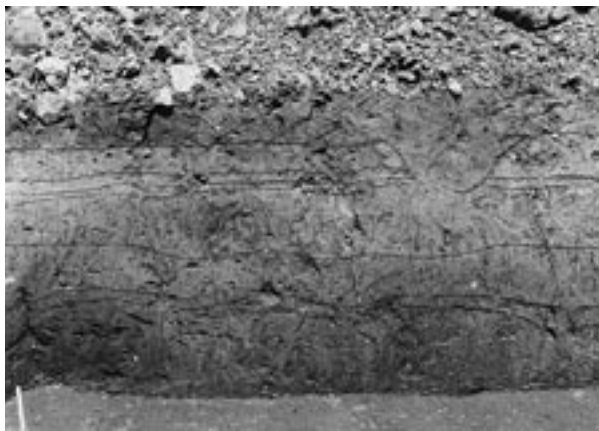
II 地区全景



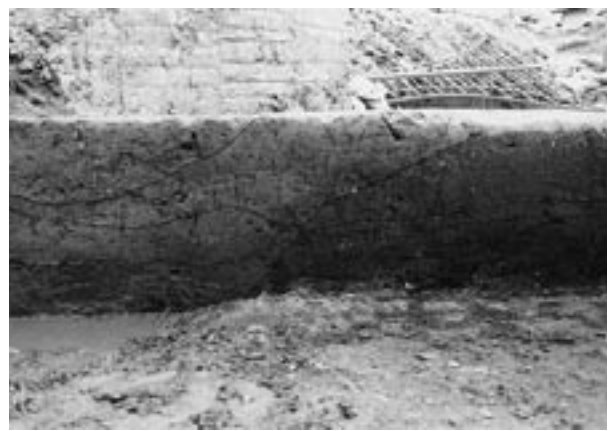
III 地区全景



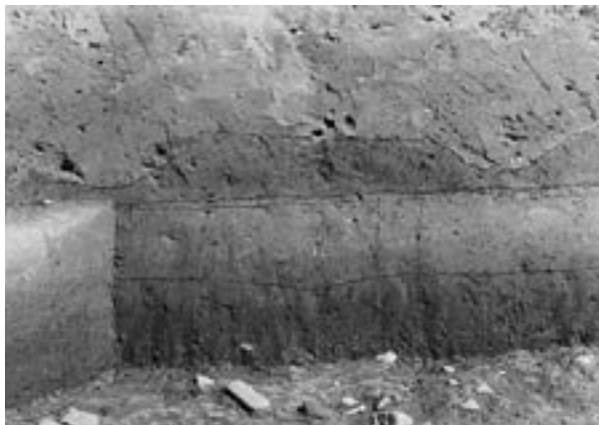
Ⅲ-d区全景（東より）



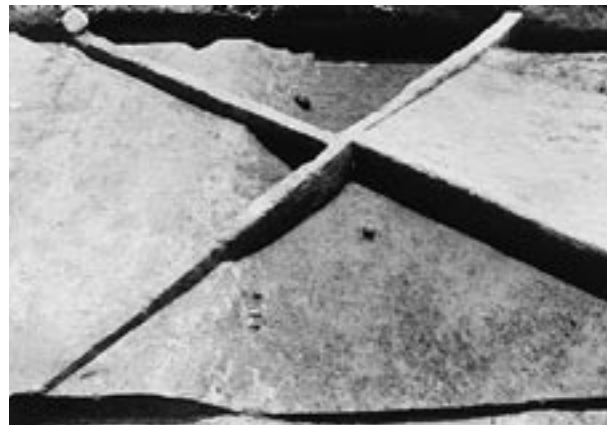
I-a区土層①



I-a区土層②



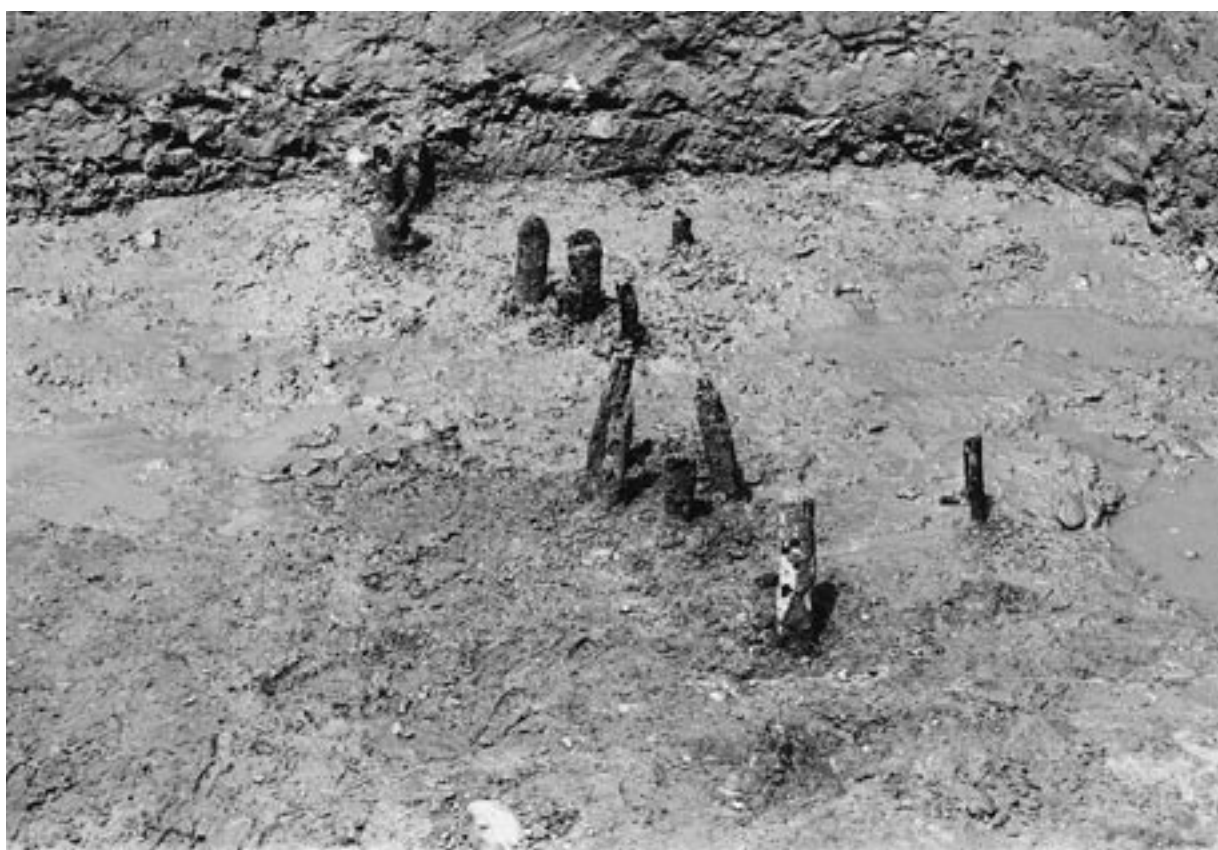
I-b区土層



I-b区包含層落ち込み（北西より）



I - a 区杭列検出状況①（東より）



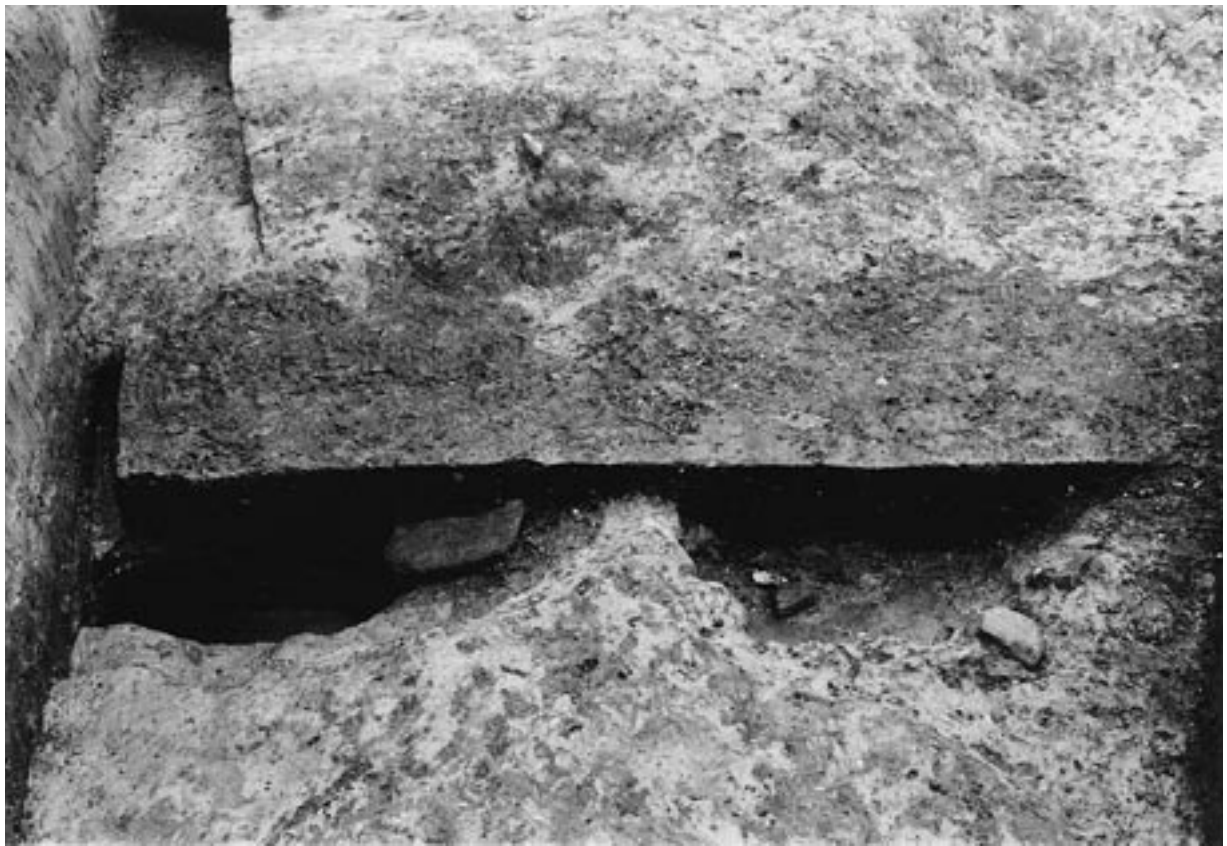
I - a 区杭列検出状況②（東より）



Ⅱ-a区包含層土層（北より）



Ⅱ-a区遺物出土状況



SK1・2半裁（西より）



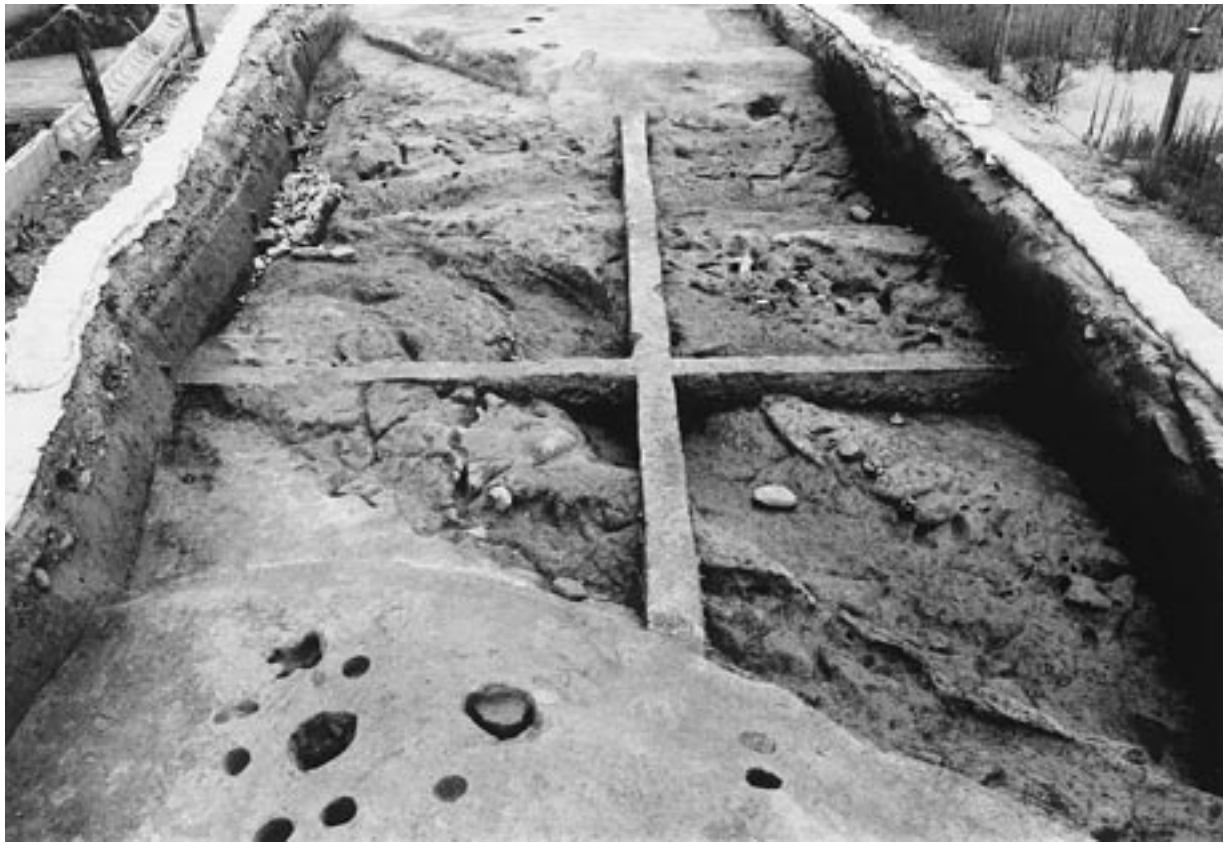
SK1・2完掘（南より）



河川跡（全景）



河川跡ベルト設定①（北東より）



河川跡ベルト設定②（南西より）



河川跡南壁土層①



河川跡南壁土層②



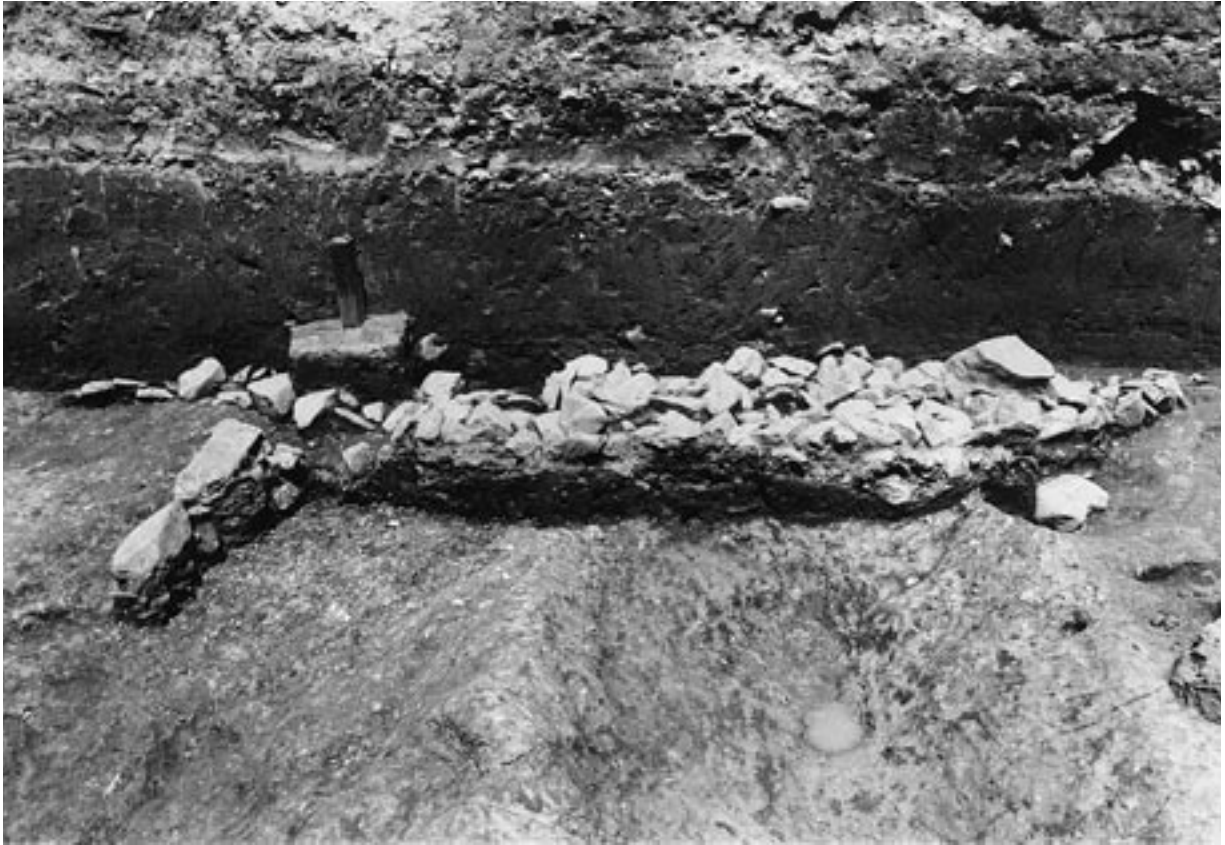
河川跡南北土層ベルト



河川跡遺物出土状況①



河川跡遺物出土状況②



河川跡集石（南西より）



河川跡集石除去状況（南西より）



河川跡完掘状況①（南西より）



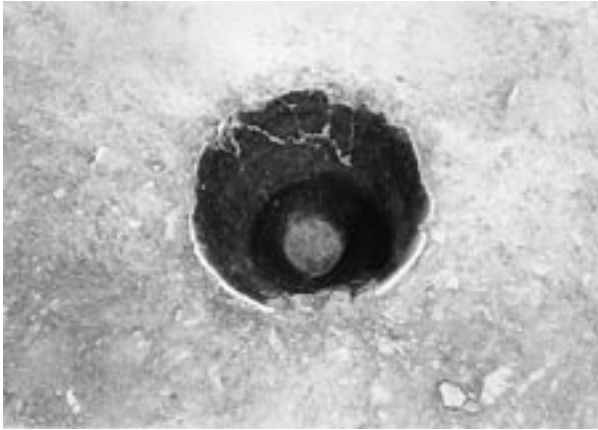
河川跡完掘状況②（北東より）



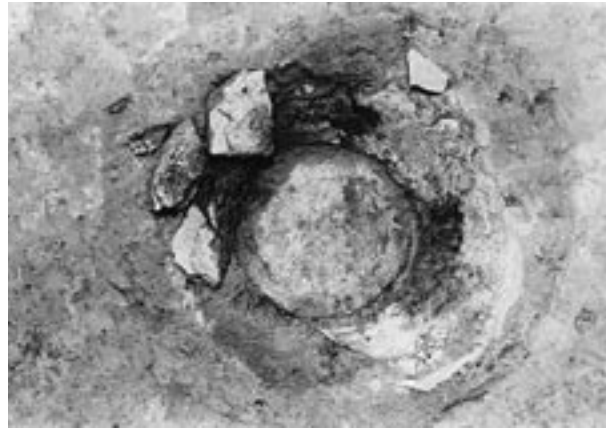
石垣1 (西より)



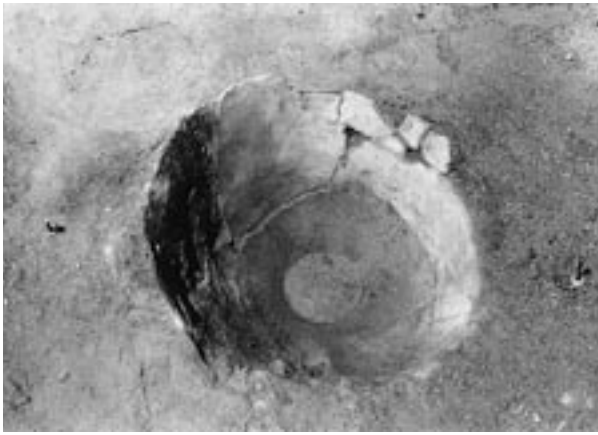
石垣2 (北より)



埋甕1 (東より)



埋甕2 (西より)



埋甕3 (南より)



SX検出状況 (北より)

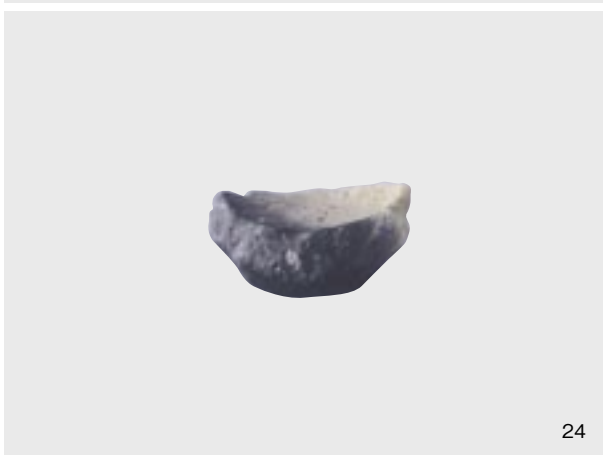


SX土師皿検出状況 (北より)



SX完掘状況 (北より)







出土遺物 (3)



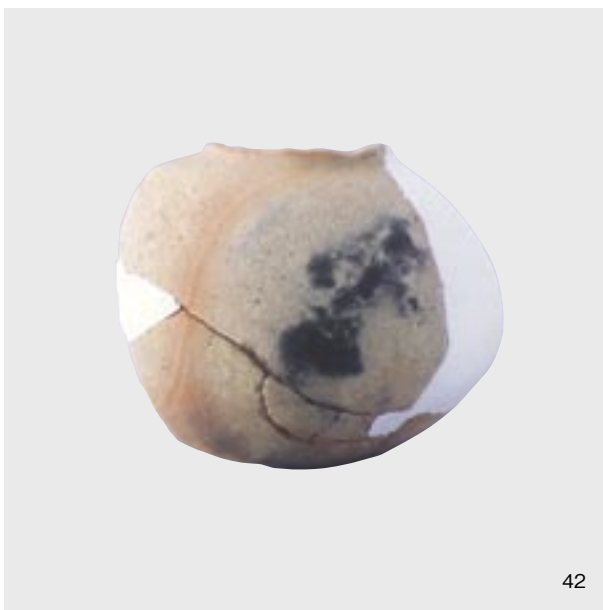
38



40



41



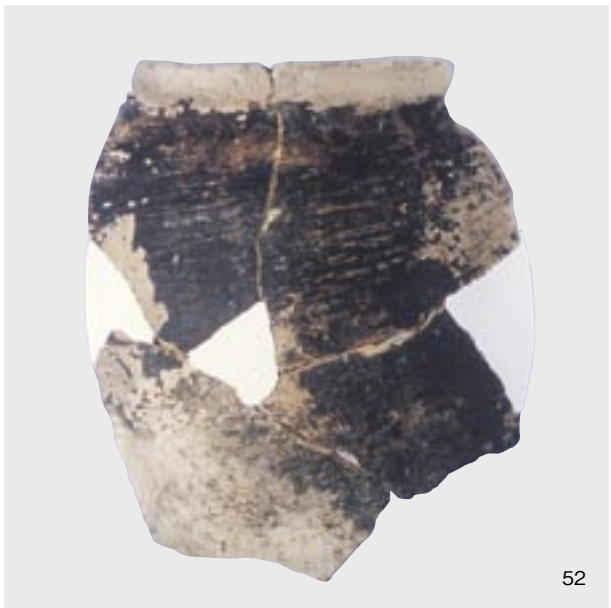
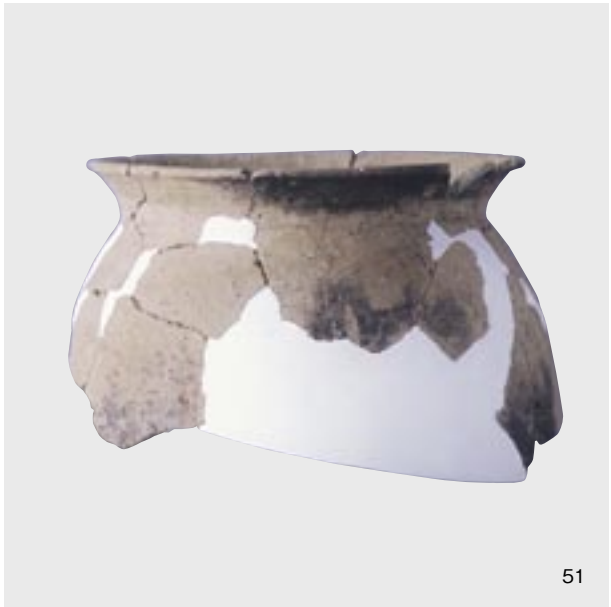
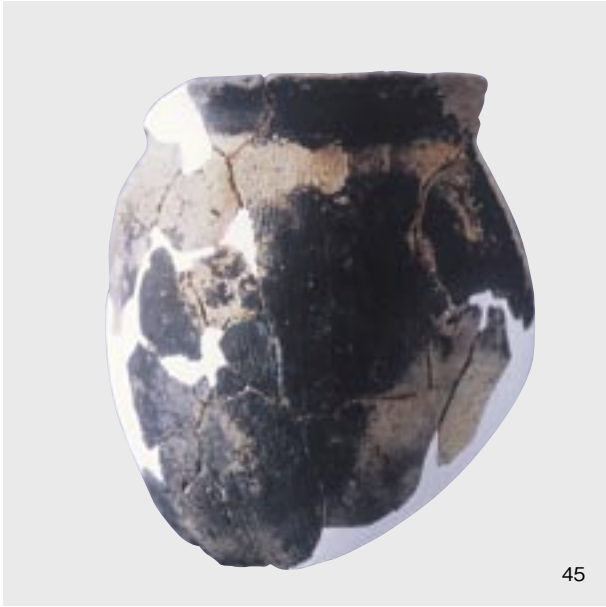
42



43



44





53



54



56



58



55



59











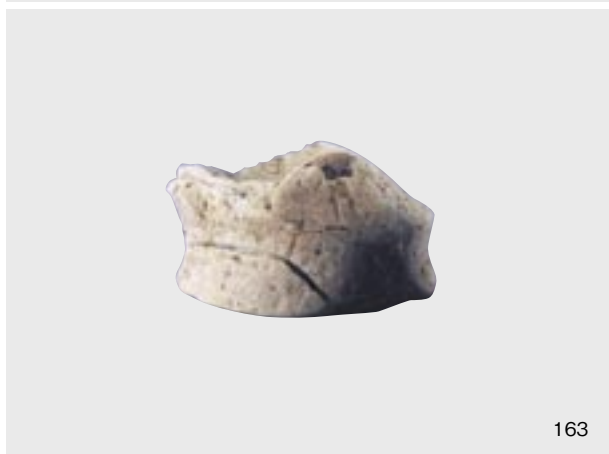


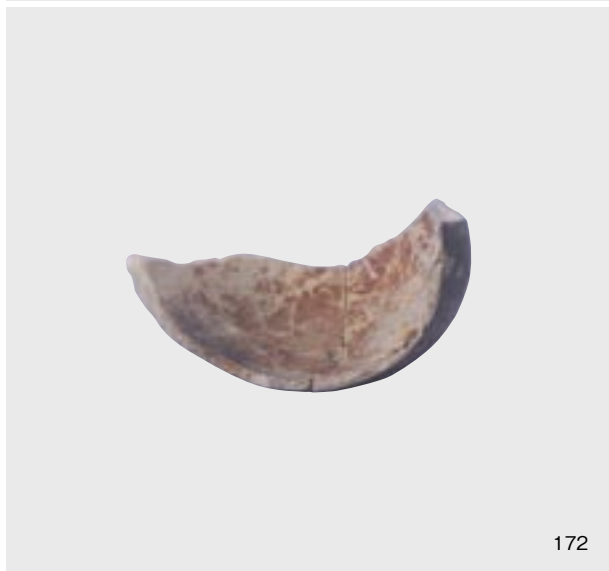
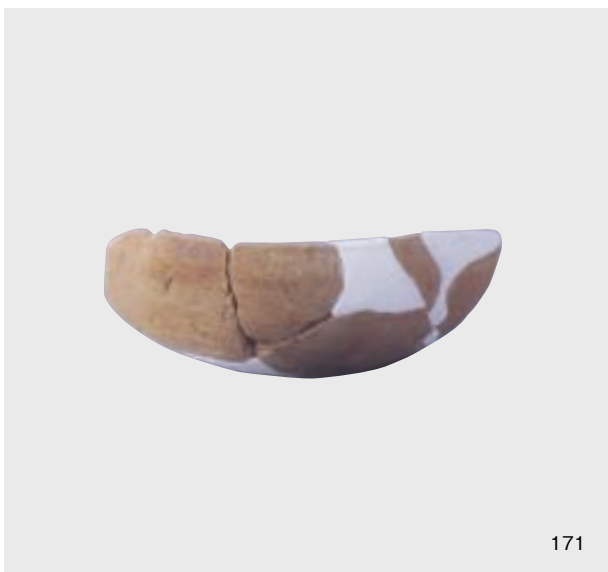
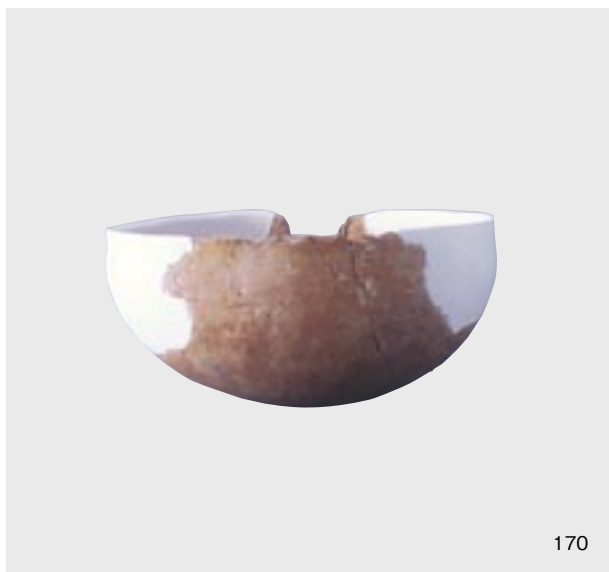




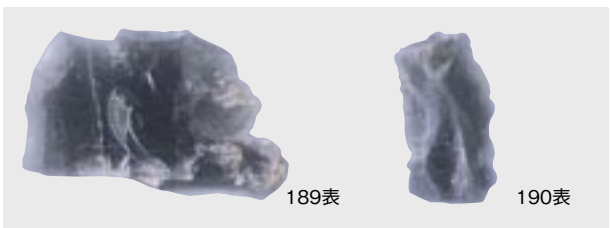
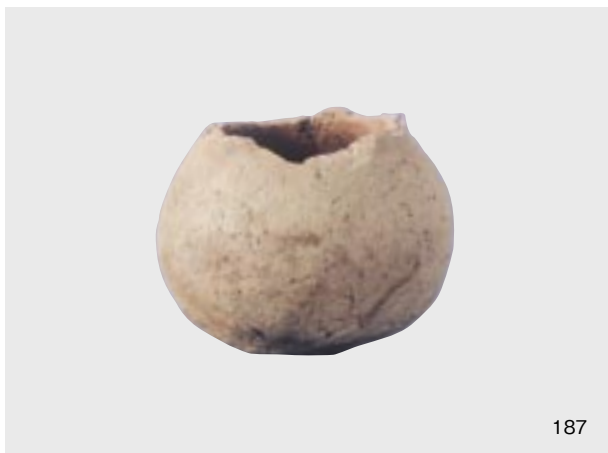
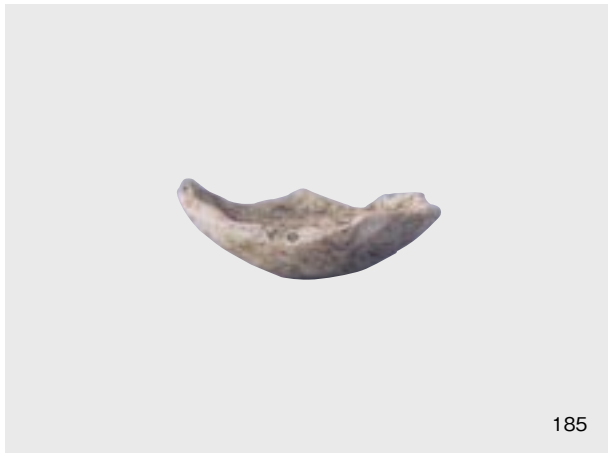
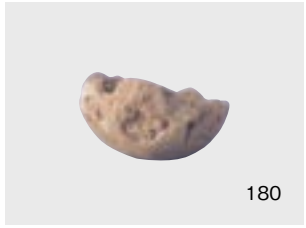
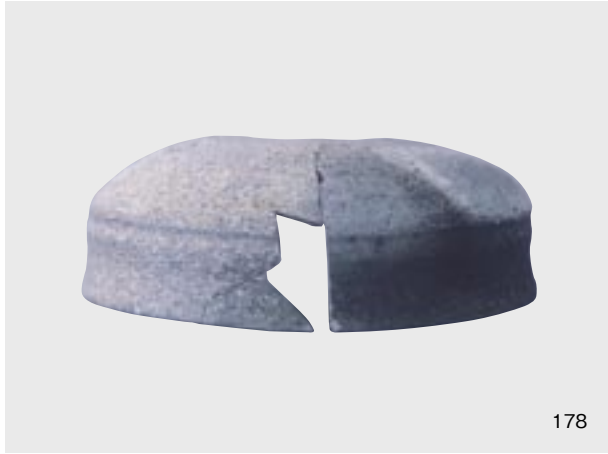


出土遺物 (15)

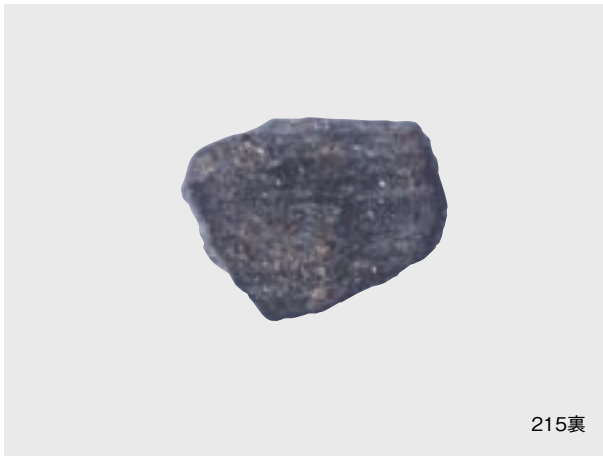




出土遺物 (17)









出土遺物 (21)



193表



193裏

出土遺物 (22)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらいしいせき
書名	白石遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第56集
編集著者名	小南裕一
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2006年3月23日（平成18年3月23日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらいしいせき 白石遺跡	やまぐちけん 山 口 県 やまぐちし 山 口 市 おおあざしらいし 大字白石	35203		34° 10' 45"	131° 28' 11"	20050509) 20050831	2,600	砂防工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
白石遺跡	集落跡	弥生時代終末 古墳時代初頭	土坑 河川跡 埋甕	2 1 3	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	弥生時代終末から 古墳時代初頭にか けての遺物包含層 と古墳時代中期の 河川跡を検出

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第56集

白 石 遺 跡

2006年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 大村印刷株式会社
〒747-0849 山口県防府市西仁井令1-21-55